

黒田清輝、久米桂一郎宛 藤島武二書簡（一）

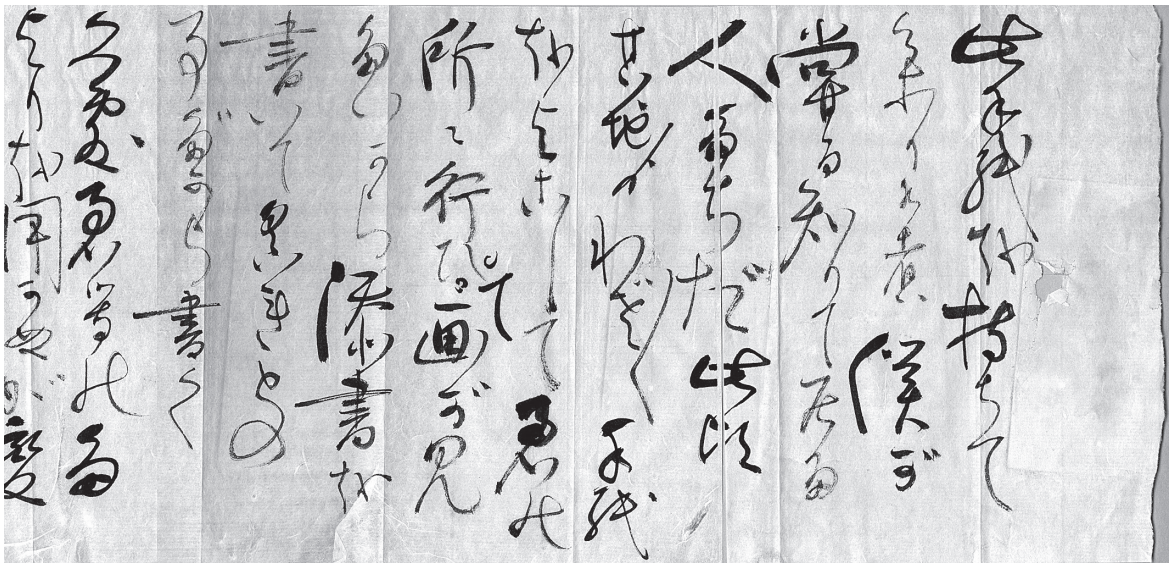
凡例

以下に、黒田清輝、久米桂一郎宛藤島武二書簡を翻刻する。翻刻および解題は兎島薫（実践女子大学教授）が担当した。翻刻にあたっては以下の点を配慮した。

- 一、所蔵の明記のない書簡はいずれも東京文化財研究所の所蔵である。
- 二、本文の行取り、文字は原則原文通りとし、影印版と照合できるように配慮した。
- 三、文中には適宜、読点（、）を加えた。
- 四、誤字・宛字・衍字がある場合も、原文のままとした。
- 五、踊り字は、平仮名は、で、片仮名は、で、漢字は々で示した。
- 六、抹消・訂正の文字がある場合、文字が判明するものについては本文にその文字を記し、左傍にクを付した。
- 七、書簡の紙継ぎ部は影印版の下縁に△をもって示した。

明治二十七年四月七日付封書

(縦一六・三cm、横五九・五cm)



此手紙を持ちて

参り候者ハ僕が

嘗而知つて居た

△人たちが、此頃

其地方わざく手紙

をよこして君の

所二行ひて画が見

たいから添書を

書いてくれとの

事だから書く

久敷君等のた

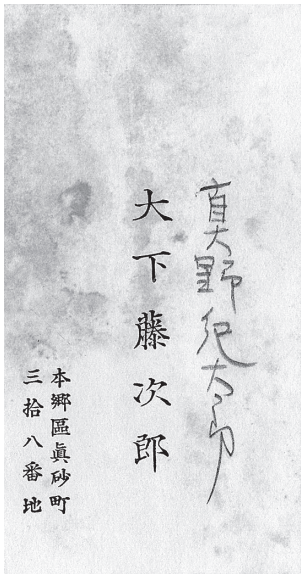
1. 黒田清輝宛藤島武二書簡(明治二十七年四月七日)

藤島が天下藤次郎のために書いた黒田宛の紹介状。封筒には切手が貼られておらず、住所も津時代のもので知られている塔西裏ではない。おそらく藤島のこの書面は、藤島から天下宛の封筒に同封して送られ、そして天下が自らの書面と共に黒田に送ったのであろう。消印がないため、発送年が不明であった。しかし黒田が帰国し、藤島が入れ違いに津に赴任したのが明治二十六年七月であり、また同封されていた天下の名刺の住所が本郷区真砂町であるが、天下は二十七年八月から九月に真砂町から追分町に転居したので、藤島の手紙は明治二十七年四月に書かれたものと判明する。また天下は明治二十七年の日記に「四月二十四日新帰朝者アンブレシヨニズムの画家黒田氏を訪ひ作品を見る」と記しており、これが藤島の紹介による訪問であったと考えられる⁽¹⁾。藤島が津に赴任する以前、いつどのように天下と出会ったかは不明である。天下の名刺には天下の名前の右に手書きで真野紀太郎の名前が書き添えられている。

藤島は津に赴任して半年以上の間、この京口町可幾屋に寄寓していたとみられよう。使用している赤い紙の封筒は津時代に共通する。

(1) 天下の動静、日記については島根県立石見美術館川西由里氏のご教示による。

名刺(縦八・四cm、横四・三cm)

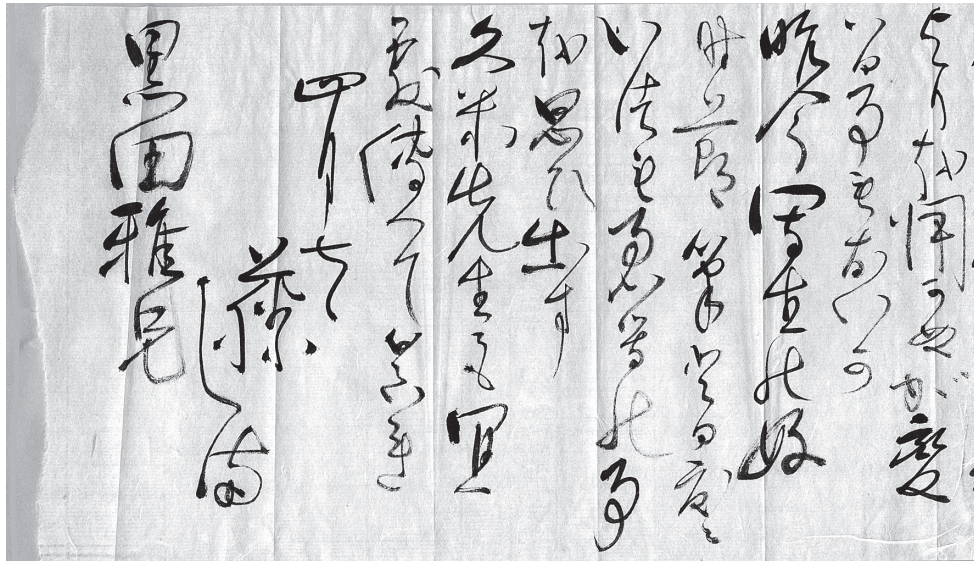


真野紀太郎
大下藤次郎

本郷区真砂町
三拾八番地

真野紀太郎
大下藤次郎

本郷区真砂町
三拾八番地



よりを聞かぬが変

ハる事もないか

昨今写生の好

時節筆とる度二

いつも君等の事

を思ひ出す

久米先生二も宜

敷傳へて呉れ

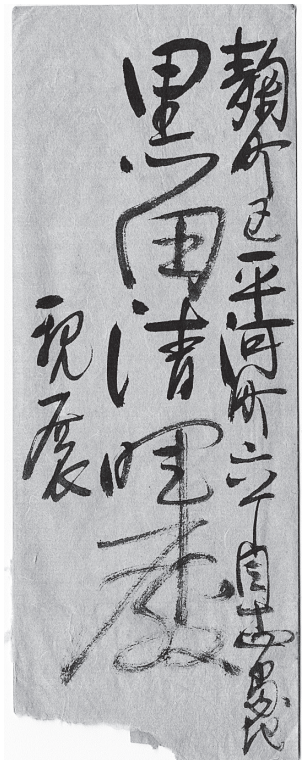
四月七日

藤しま

黒田雅見

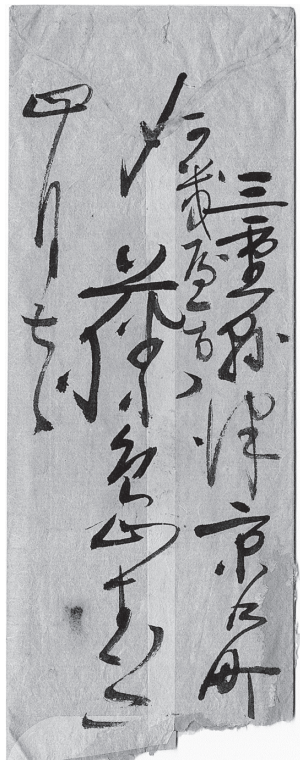
黒田清輝、久米桂一郎宛 藤島武二書簡

封筒(縦一九・一cm、横七・一cm)
(表)



親展
黒田清輝殿
頼所区平河町六丁目十四番地

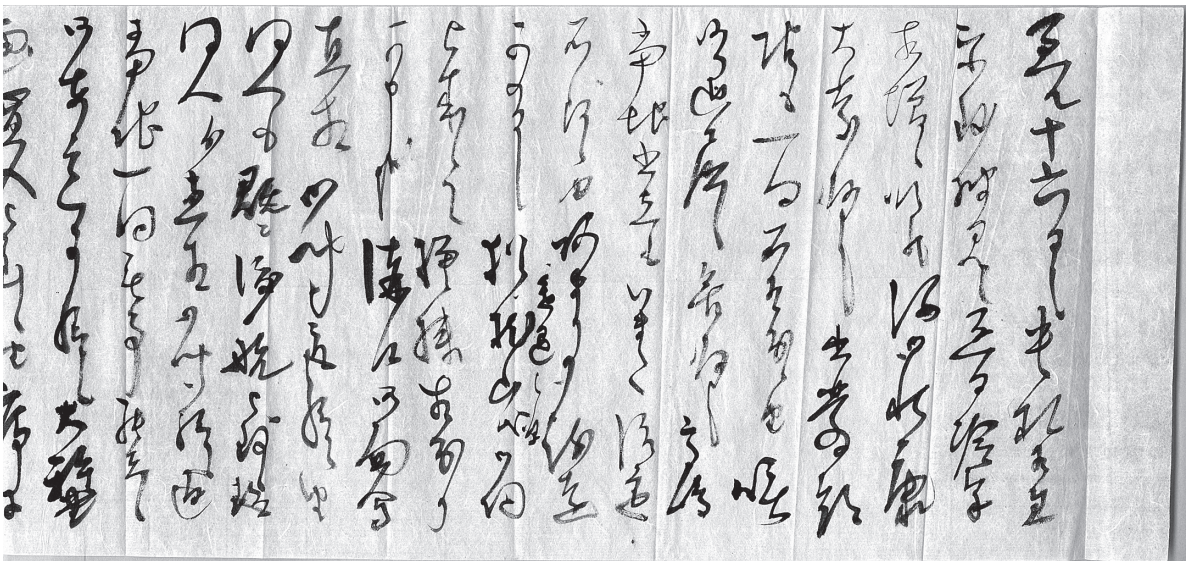
(裏)



三書房津京口町
可幾屋方
× 藤島武二
四月七日

明治二十七年十一月二十一日付封書

(縦一六・三cm、横六一・三cm)



過ル十六日之貴札相達

忝致被見候、逐日冷氣

相増候得共弥即壯康

大慶存候、出發期

限も一向不相分候由、嘸

御退屈之筈存候 高嶋

當地出立もいまた治定

不致候由、あまりに待遠

進退之儀

可有之候猶龍山氏御伺

被成候はば模様相分り

可申候哉、溝口御面會

直相御聞取給候由

同人も既ニ渡航被致候趣

同人方直相御聞給候通

當地一同無事罷在候

御安意可給候、大雅堂

2 | (1) 黒田清輝宛黒田清綱書簡(明治二十七年十一月二十一日)

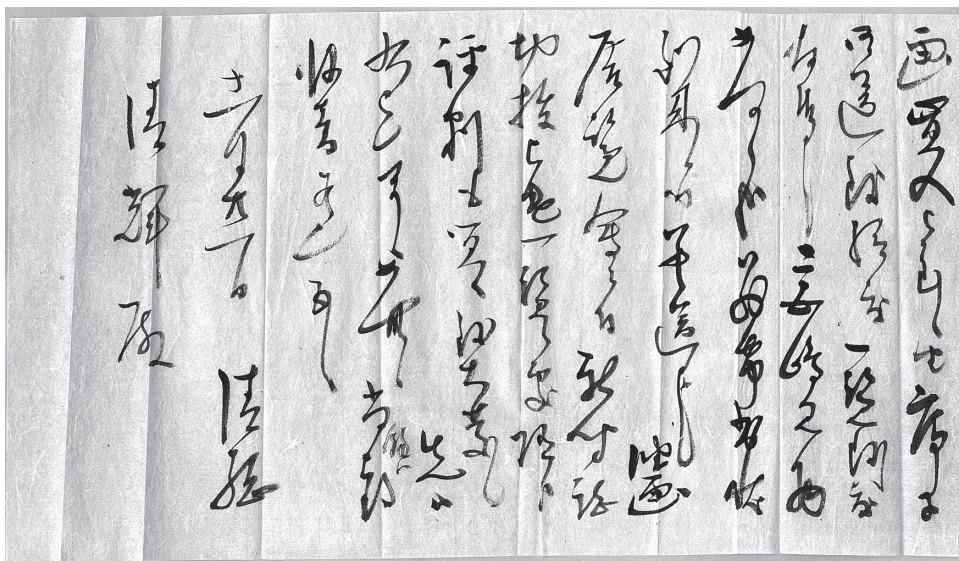
清綱の手紙は黒田が十六日付で送った手紙への返信。清輝は日清戦争に画家として従軍するために広島の大本営に向かったが、現地で足止めのままなかなか戦地に渡ることができなかった。この様子を書き送ったことに対し、清綱は、直接溝口なる人物に会って様子を聞くことを勧めている。清輝は十九日付の久米宛の手紙で宮島の紅葉谷に来て写生をしている様子を述べており、清綱に宛てた十六日の手紙にもこれから宮島に行くことを書き送ったのであろう。清綱から宮島がどうであったかと尋ねている。また新聞での明治美術会の評判がよかったことを伝えている。

黒田はこの後、十一月二十九日に豊橋丸で山階宮殿下と同船で出立する。(2)

清綱は清輝の留守中に届いていた明治美術会からの礼状と藤島からの葉書を同封して送っている。

(1) 「蹄の痕(一)」『黒田清輝著述集』東京文化財研究所編、二〇〇七年、一九七頁。

(2) 『黒田清輝日記第二卷』、中央公論美術出版、一九六七年、三五二―三五三頁。



画買入被致候由、序に

御送致給度一覽致度

存居候、宮嶋見物

△如何候哉、別昏書状

到來候ハバ差送申候、油画

展覽會ニ付新聞誌

切抜被遣一覽候處随分

評判も宜く致大慶候

先は

右迄 早々如此候 尚餘ハ期

後音候也 頓首

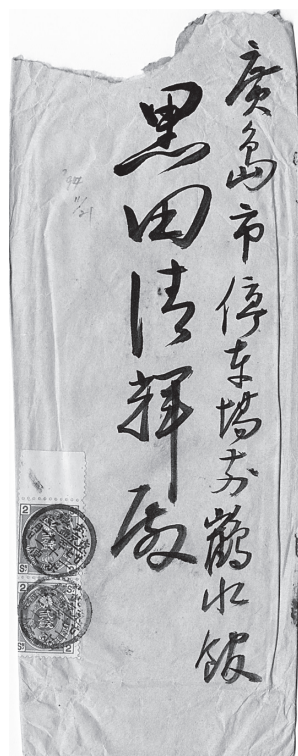
十一月廿一日

清綱

清輝殿

黒田清輝、久米桂一郎宛 藤島武二書簡

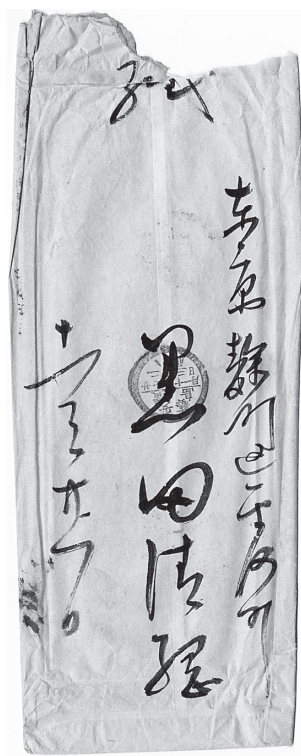
封筒(縦三三・九cm×横九・五cm)
(表)



廣島市停車場前鶴水館

黒田清輝殿

(裏)



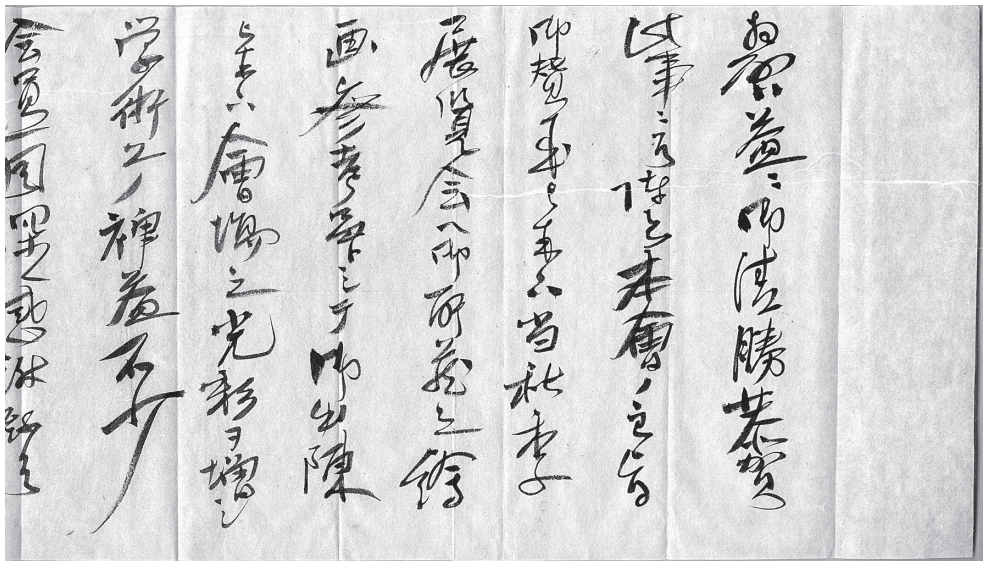
東京麴町区平河町

黒田清綱

十一月廿一日

明治二十七年十一月十二日付封書

(縦一八・四cm、横五五・六cm)



拝啓益々御清勝恭賀

此事二候、陳者本會ノ主旨

御賛成被成下、当秋季

展覧会へ御所蔵之繪

画参考品トシテ御出陳

被成下会場之光彩ヲ増シ

学術上ノ裨益不少

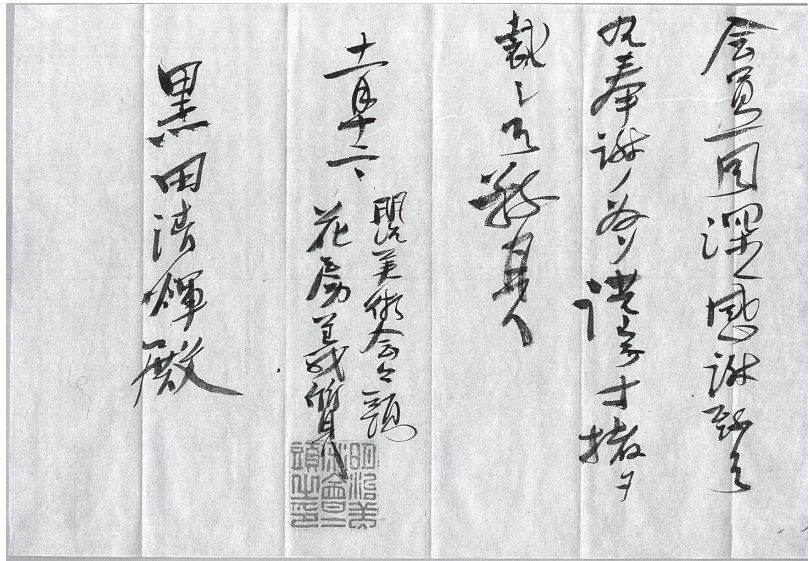
2 | (2) 黒田清輝宛花房義質書簡(明治二十七年十一月十二日)

父清綱が自分の手紙に同封して清輝に送ったもの。

明治美術会会頭花房義質からの参考品出品に対する礼状。展覧会に関する新聞記事の切り抜きも届いたようである。封書には切手が貼られておらず、作品返却と共に持参したのであろう。この年の六回明治美術会展の目録は不明のため参考品の内容は不詳。久米桂一郎は黒田への仏文手紙に「今朝、上野の展覧会の作品を取りに来たよ。親爺の習作2点と、『ゴジサク』(御自作)の額縁を3点渡しておいた」と記しており、この時久米は「親爺」、つまりラファエル・コランの習作を出している。

(1) 東京文化財研究所企画情報部編『黒田清輝フランス語資料集』東京文化財研究所、

二〇一〇年、二八五―二八六頁所収、C069。



會員一同深く感謝致候

右奉謝ノ為メ謹而寸楮ヲ

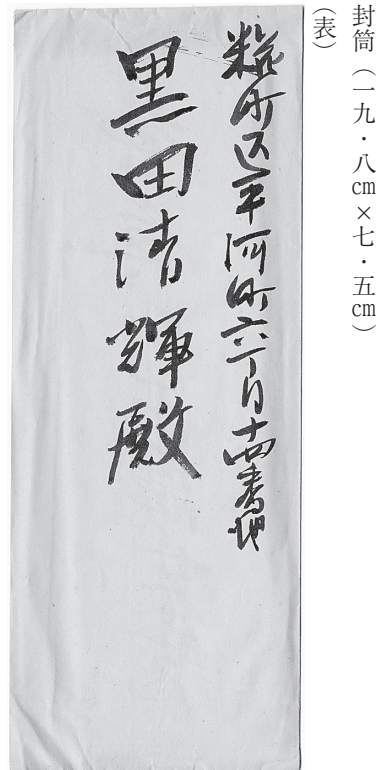
裁シ候 敬具

十一月十二日

明治美術會々頭
花房義質

朱文方印「明治美術會々頭之印」

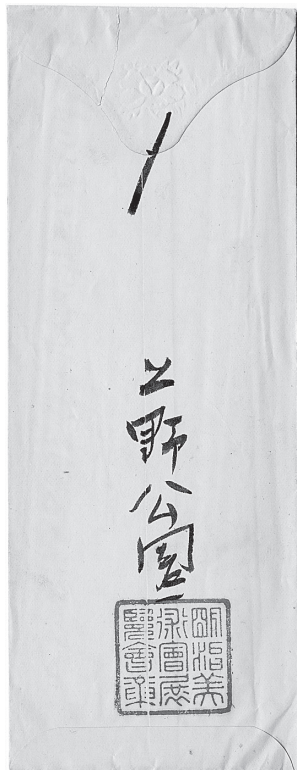
黒田清輝殿



封筒（一九・八cm×七・五cm）
（表）

糺町区平河町六丁目十四番地

黒田清輝殿



（裏）

上野公園

朱文方印

「明治美術會展覽會章」

明治二十七年十一月十九日付葉書

(縦一四・〇cm、横八・九cm)

(裏)

昨夜寝られぬまゝに
頻二君の事が頭二浮んだよ
此頃如何二暮して居るか
何か面白きものが出来
るかね、久米兄二も宜敷言
つて置てくれ

(表)

東京麹町区平川町六丁目十四番地
黒田清暉殿
三重縣尋常中
学校二而
藤島武二
十一月十九日

2-1 (3) 黒田清輝宛藤島武二葉書 (明治二十七年十一月十九日)

清綱が二つ折りにして同封したもの。藤島は前年の七月三日付で三重県尋常中学校助教諭に任じられ (東京芸術大学所蔵履歴書) 津に赴任していた。葉書は、夜眠れないまま東京の黒田たちが制作している様子を思い、孤独と焦燥にかられていた心理状態を伝える。帰宅を待たずに職場から矢も立てもたまたまらず葉書を出したようであるが、黒田は日清戦争に従軍するため留守であった。文面からは、藤島が黒田、久米と既に親しい様子をうかがえる。

明治二十八年一月一日付 葉書

(縦一三・九cm、横八・九cm)

(裏)

謹賀新年
三重縣津市
一月
元旦
藤島武二

(表)

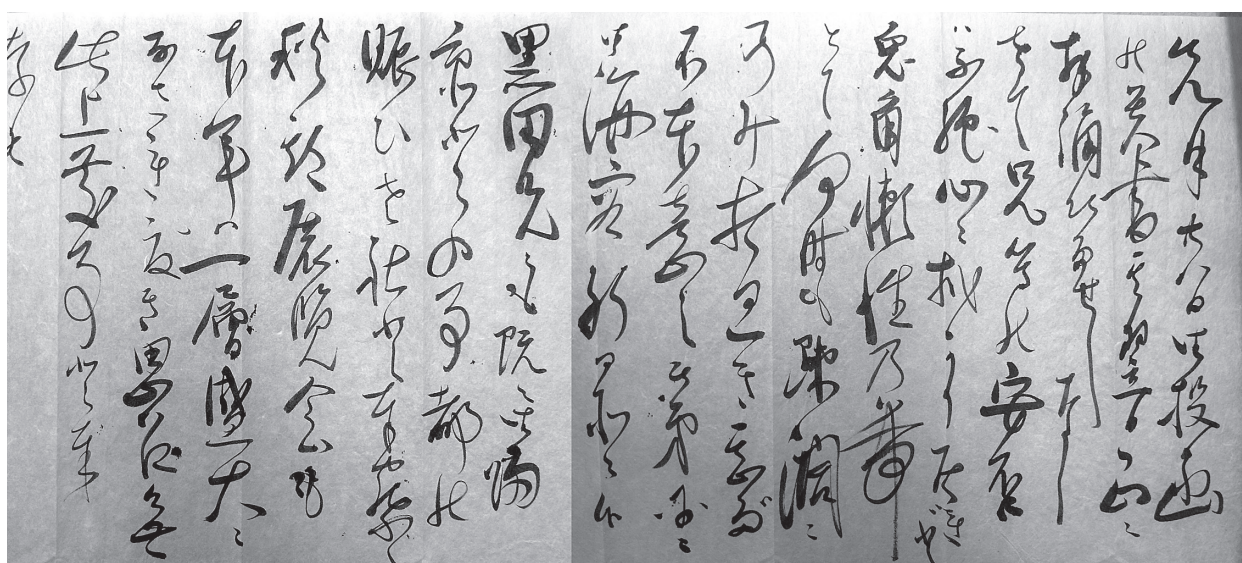
東京麹町区平川町六丁目十四番地
黒田清暉殿
三重縣尋常中
学校二而
藤島武二
一月一日

3. 黒田清輝宛藤島武二葉書 (明治二十八年一月一日)

明治二十八年の年賀状。当時黒田はまだ日清戦争に従軍中である。

明治二十八年九月十日付封書

(縦一七・二cm、横一五〇・五cm)



先月廿八日御投函

の貴書其翌日正二

拝誦いたせしなり

さて兄等の安否

ハ不絶心ニ掛かり居れど

兎角慚性の事

とて何時も疎濶ニ

のみ打過ぎ甚だ

不本意之次第、平ニ

御海容祈る所ニ候

黒田兄ニも既ニ御帰

京との事、都の

賑ひを壮と奉察候

秋期展覧会も

本年ハ一層盛大ニ

なされ度き思いに無

此上慶事と奉

4. 久米桂一郎宛藤島武二書簡(明治二十八年九月十日) 東京国立博物館蔵

封筒に記された藤島の住所は、津市塔世西浦六十二番である。陰里鉄郎氏の調査によれば当時の地図などでは「塔世西裏」と表記されている場所であり、現在の津市北丸之内にあたる⁽¹⁾。藤島は多く「西浦」と記すが、「西裏」と記すこともある。久米の住所は結婚前に住んでいた京橋区三十間堀二丁目である。

内容は久米からの手紙への返信である。文面から、久米は前便で、黒田が既に従軍から帰っていること、秋の展覧会を一層盛大におこないたいことなどを述べていたようである。「今回兄等御計画」が何を指すのかは不明であるが、翌年の白馬会結成のことであるならば、従来知られていたよりも早くから黒田らが新団体結成の構想を抱いていたことになる。あるいはこの後の手紙で語られる展覧会出品作の画集制作のことを述べている可能性もある。藤島は制作への意欲を語りながらも、都会を離れた地で洋画を描くことの困難を訴えている。それでもようやくモデルを見つけて制作中であることを伝えている。封筒には藤島の写真が封入されていたようであるが現在不明。

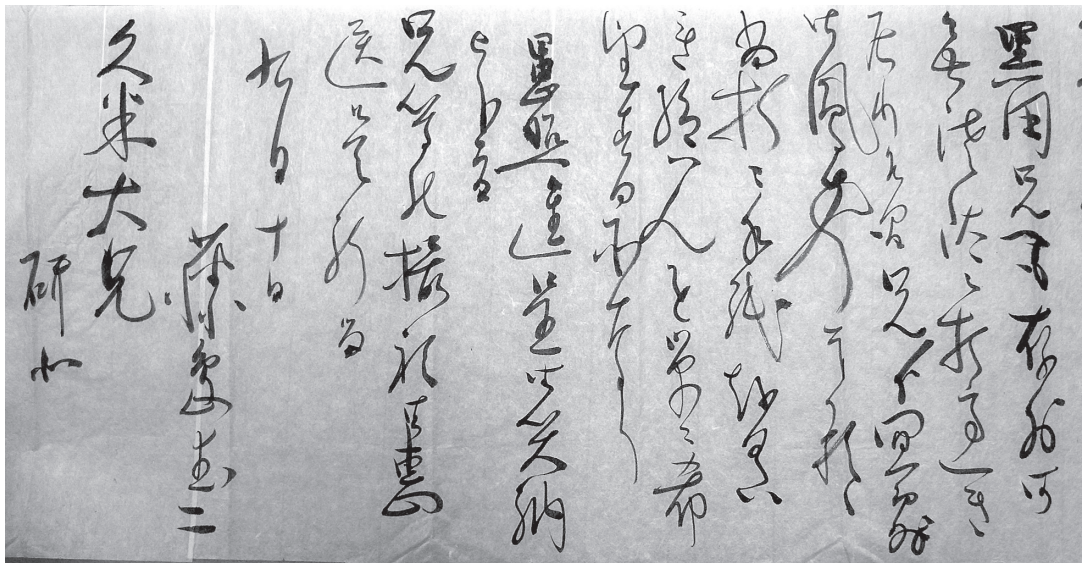
(1) 陰里鉄郎「画家たちの津(一)」『陰里鉄郎著作集2』一艸堂、二〇〇七年、四六一六〇頁。

存候
 右二就き而ハ充分の
 御盡力特ニ兄等
 に向つて切望する
 所なり
 今回兄等御計画
 僕も大賛成ニ有之
 殊ニ兄等の馬前ニ
 打じに致し候事ハ
 平素の本懐ニ候
 間、充分奮発出品
 致し候 御高教を仰
 き度存居候得共
 何分ニも御存知の通
 りの哀れなる境遇
 ニ而ハ、何時も満足なる
 製作も不出来
 残念之至ニ御座候
 僕等ハ実ニ技術の

存候
 右二就き而ハ充分の
 御盡力特ニ兄等
 に向つて切望する
 所なり
 今回兄等御計画
 僕も大賛成ニ有之
 殊ニ兄等の馬前ニ
 打じに致し候事ハ
 平素の本懐ニ候
 間、充分奮発出品
 致し候 御高教を仰
 き度存居候得共
 何分ニも御存知の通
 りの哀れなる境遇
 ニ而ハ、何時も満足なる
 製作も不出来
 残念之至ニ御座候
 僕等ハ実ニ技術の

上の苦心よりハ其れ
 を準備する迄の
 困難多く、何時も
 大ニ閉口いたし候
 さりながら今回の
 御盛舉を賛成
 しながら全く出品
 致さぬも口惜しき
 次第なればつまらぬ
 物でも一二枚出品致
 度、今一枚ハ此頃漸く
 モデルを得て目下
 折角製作最中
 なれば開会迄二出来
 上る者かどうだか
 知らず候

上の苦心よりハ其れ
 を準備する迄の
 困難多く、何時も
 大ニ閉口いたし候
 さりながら今回の
 御盛舉を賛成
 しながら全く出品
 致さぬも口惜しき
 次第なればつまらぬ
 物でも一二枚出品致
 度、今一枚ハ此頃漸く
 モデルを得て目下
 折角製作最中
 なれば開会迄二出来
 上る者かどうだか
 知らず候



黒田兄へも存外御

無沙汰ニ打過

居り候間兄方宜敷

御鳳聲奉候

尚折々手紙をく

れ給はんこと単二希

望する所なり

愚照進呈御笑納

被下度

兄等の撮礼御恵

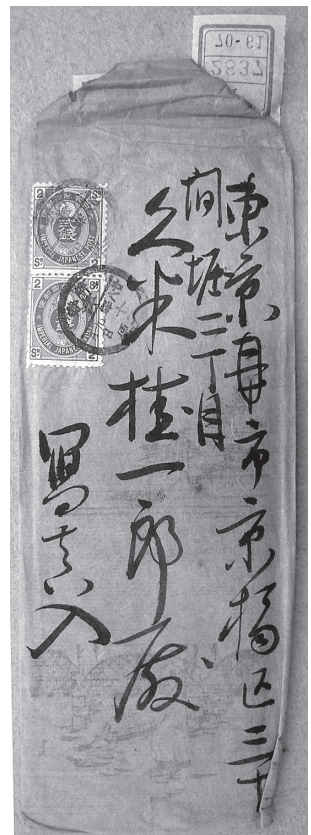
送是祈る

九月十日

藤島武二

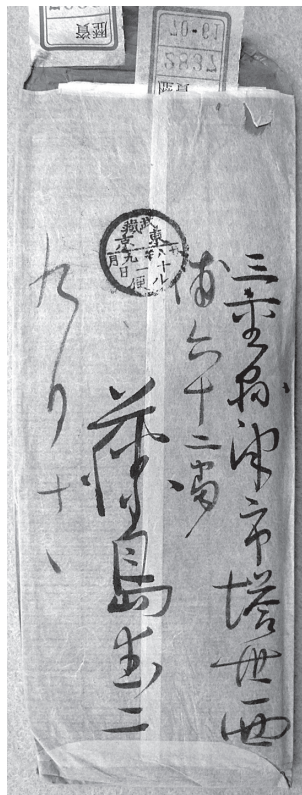
久米大兄

研北



封筒 (縦一九・〇cm、横七・六cm)
(表)

(裏)

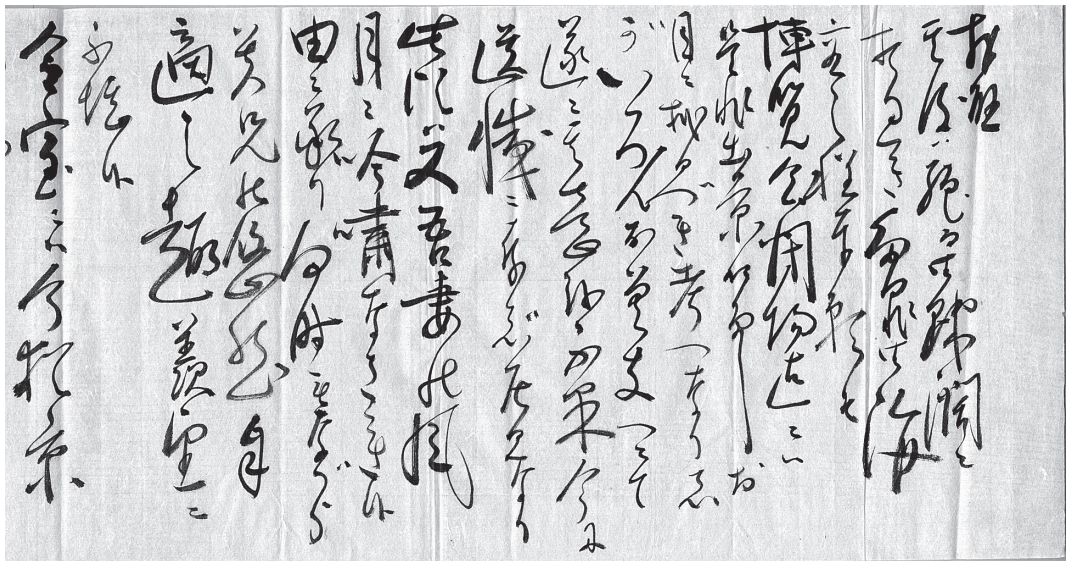


東京市京橋区三十三間堀二丁目
久米桂一郎殿
寫真人

三重縣津市塔世西浦六十二番
藤島武二
九月十日

明治二十八年九月二十二日付封書

(縦一七・一cm、横一四〇・〇cm)



拝啓

其後ハ絶而御疎濶ニ

打過き多罪、御海

容之程奉願候。

博覧会閉場迄ニハ

是非出京いたしお

目ニ掛るべき考えなりし

が、いろんな差支へにて

遂ニ其意を不果、今に

遺憾ニ存じ居るなり

此頃ハ又吾妻の風

月ニ吟嘯なされ候

由ニ承り、何時もながら

貴兄の悠然自

適之趣羨望ニ

不堪候

令室ニハ今猶京

5. 黒田清輝宛藤島武二書簡(明治二十八年九月二十二日)

この書簡については陰里鉄郎氏が既に翻刻し詳しい解説を加えており、それを参照した。⁽¹⁾「博覧会」とは京都で開催された第四回内国勸業博覧会を指し、藤島は、黒田が京都に審査官として滞在中に会いに行きたかったが行くことができなかったと述べている。博覧会には、黒田が《朝妝》を、藤島は《御裳裾川》を出品していたが、藤島は展示を見ることができなかったことになろう。文面からは、黒田は妻を京都に残して上京していたようである。明治二十八年三月から八月にかけての久米桂一郎、杉竹二郎らの手紙によって、黒田が京都松原通大和路東二丁目興善寺町小谷義一郎旧水口屋敷に新婚の妻と住んでいたことがわかつてい⁽²⁾る。

また「既ニ兄が知つて居る通り」とあるように、黒田はこれ以前に津を訪れていたことになる。これについても陰里氏は『黒田子爵追懷座談会』のなかで黒田と久米が津を訪れた際に藤島が西洋料理をご馳走したと話していたことから、これが津の偕楽公園の津公園俱樂部であったことを明らかにしている。

画材の入手も困難であり、批評してくれる相手もない場所で制作する孤独を訴え、黒田の写真を送って欲しいと頼んでいる。

(1) 前掲、陰里鉄郎「画家たちの津(一)」、四六一六〇頁。「画家たちの津(二)」、六一一六五頁。

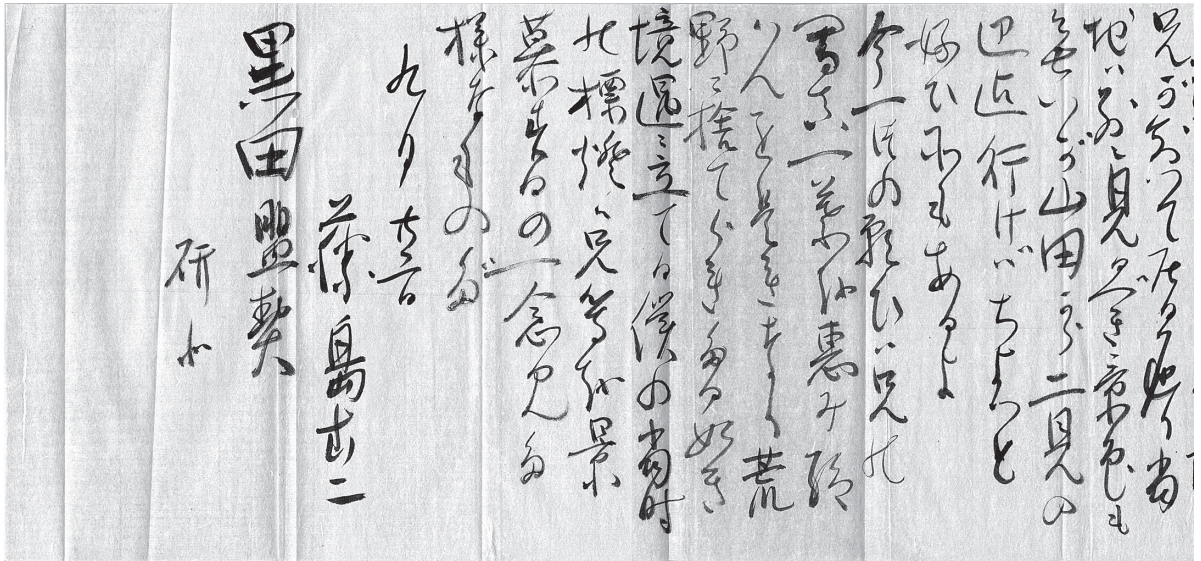
(2) 東京文化財研究所企画情報部編『黒田清輝フランス語資料集』東京文化財研究所、二〇一〇年、二九〇頁―三〇七頁所収、C073―C089。

都におハすとやら
 申せば、貴兄ニハ當分
 同地方ニ御住ひの思召
 なるや伺ひ度きもの
 なり
 僕も不相替なニカ
 しらん絶へず描いてハ
 居れども誰れも悪口
 言つてくれる者無
 きニハ実ニ閉口するなり
 何時も俗子の賞賛
 増々魔界ニ導かる、
 心地して不愉快ニ不
 堪偶々自分自らを
 鼓舞して着手し
 たる畫も
 萬事不如意之為
 め種々困難を経な
 ければならぬ、素方
 一面を經營すること

都におハすとやら
 申せば、貴兄ニハ當分
 同地方ニ御住ひの思召
 なるや伺ひ度きもの
 なり
 僕も不相替なニカ
 しらん絶へず描いてハ
 居れども誰れも悪口
 言つてくれる者無
 きニハ実ニ閉口するなり
 何時も俗子の賞賛
 増々魔界ニ導かる、
 心地して不愉快ニ不
 堪偶々自分自らを
 鼓舞して着手し
 たる畫も
 萬事不如意之為
 め種々困難を経な
 ければならぬ、素方
 一面を經營すること

何人ニも容易の業ニハ
 非るべくも、僕等ハ実ニ
 技術の上ニ注げる苦心
 よりも寧ろ其準備ニ
 費す困難多く、亦
 何時も心ニ副ハざる為め
 半途ニ而切裂かんかと
 思ふ作も老母の悲
 みを恐れて無理ニ公
 衆の前ニ出陳すること
 如何ばかり不愉快の
 ものとかハ知る
 此頃も秋期展覽會物
 をやつて居るが、是も
 めちやくちやな物だ
 若君其地ニて一見したら
 充分悪口を聞かして
 くれ
 さて京都ニ帰る折ニハ
 立寄つてくれぬか、既ニ

何人ニも容易の業ニハ
 非るべくも、僕等ハ実ニ
 技術の上ニ注げる苦心
 よりも寧ろ其準備ニ
 費す困難多く、亦
 何時も心ニ副ハざる為め
 半途ニ而切裂かんかと
 思ふ作も老母の悲
 みを恐れて無理ニ公
 衆の前ニ出陳すること
 如何ばかり不愉快の
 ものとかハ知る
 此頃も秋期展覽會物
 をやつて居るが、是も
 めちやくちやな物だ
 若君其地ニて一見したら
 充分悪口を聞かして
 くれ
 さて京都ニ帰る折ニハ
 立寄つてくれぬか、既ニ



兄が知つて居る通り當
地ハ別ニ見るべき景色も
無いが山田から二見の
辺迄行けばちよつと
好ひ所もあるよ
今一つの願ひハ兄の
寫真一葉を恵み給
はんことは是れなり、荒
野ニ捨てられたる如き
境遇ニ立てる僕の當時
の標燈ハ、兄等を景
慕するの一念みた
様なものだ

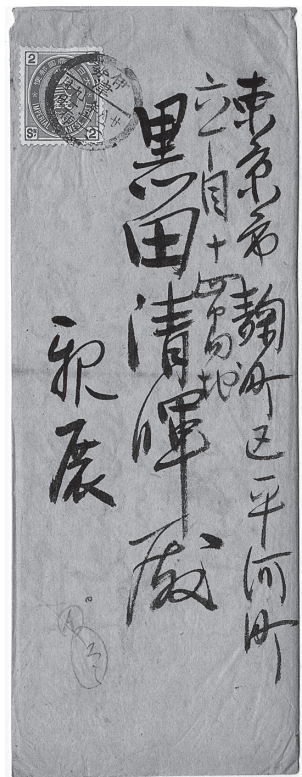
九月廿二日

藤島武二

黒田盟契

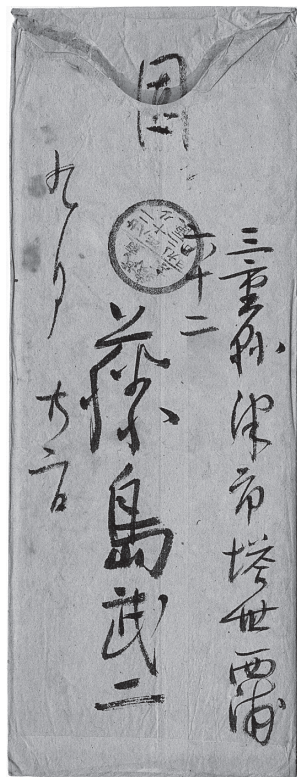
研北

封筒 (縦一九・三cm、横七・一cm)
(表)



東京市麹町区平河町
六丁目十四番地
黒田清暉殿
親展

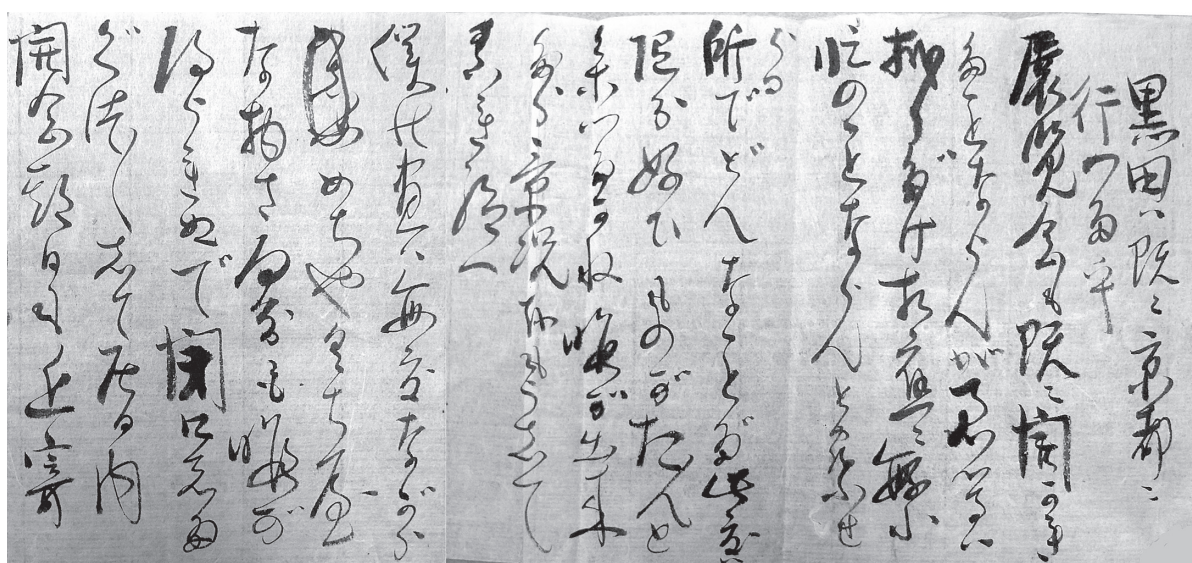
(裏)



三重縣津市塔世西浦
六十二
藤島武二
九月廿二日

明治二十八年十月十一日付封書

(縦一五・九cm、横一四八・四cm)



黒田ハ既ニ京都ニ
行つた乎

展覧会も既ニ開かれ

たことならんが君等ハ

掛りだけ相應ニ繁

忙のことならんと察せ

黒田ハ既ニ京都ニ
行つた乎
展覧会も既ニ開かれ
たことならんが君等ハ
掛りだけ相應ニ繁
忙のことならんと察せ
らる

所でどんなことだ此度ハ

随分好みものがたんと

集つたかね、暇が出来

△たら景況をしらして

所でどんなことだ此度ハ
随分好みものがたんと
集つたかね、暇が出来
△たら景況をしらして
くれ給へ

僕の畫ハ毎度ながら

めーめめちやくちや

な物さ何分ニも暇が

得られぬで閉口した

ぐつぐつして居る内

開会期日も近寄

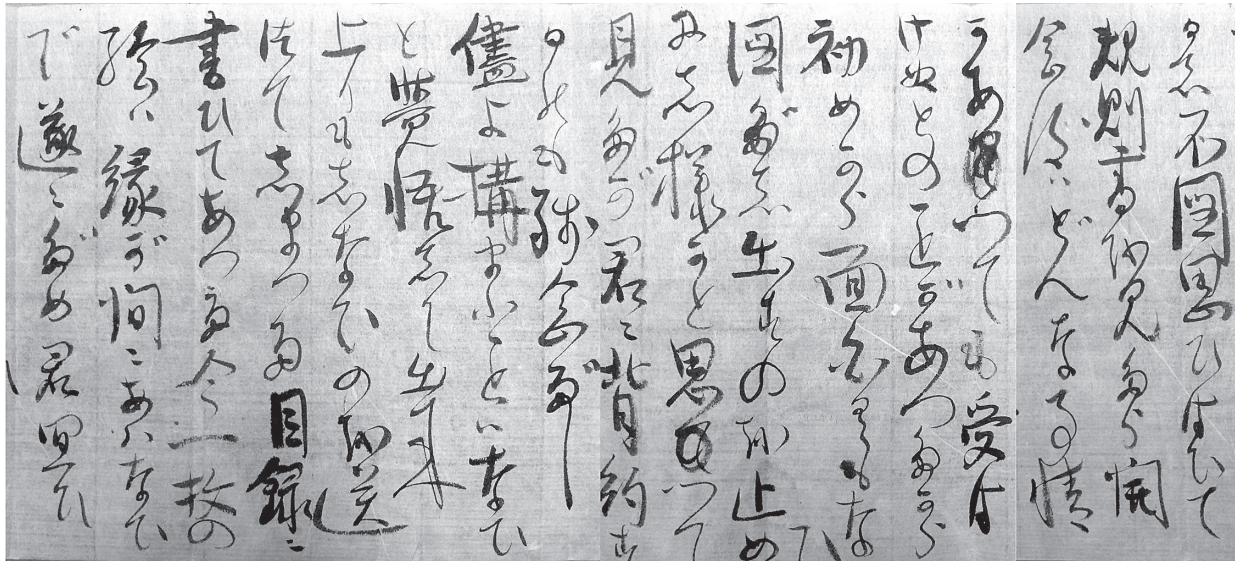
僕の畫ハ毎度ながら
めーめめちやくちや
な物さ何分ニも暇が
得られぬで閉口した
ぐつぐつして居る内
開会期日も近寄

6. 久米桂一郎宛藤島武二書簡(明治二十八年十月十一日) 東京国立博物館蔵
文面からは黒田はおそらくまだ京都に妻がおり、東京と京都とを往復していた様子である。

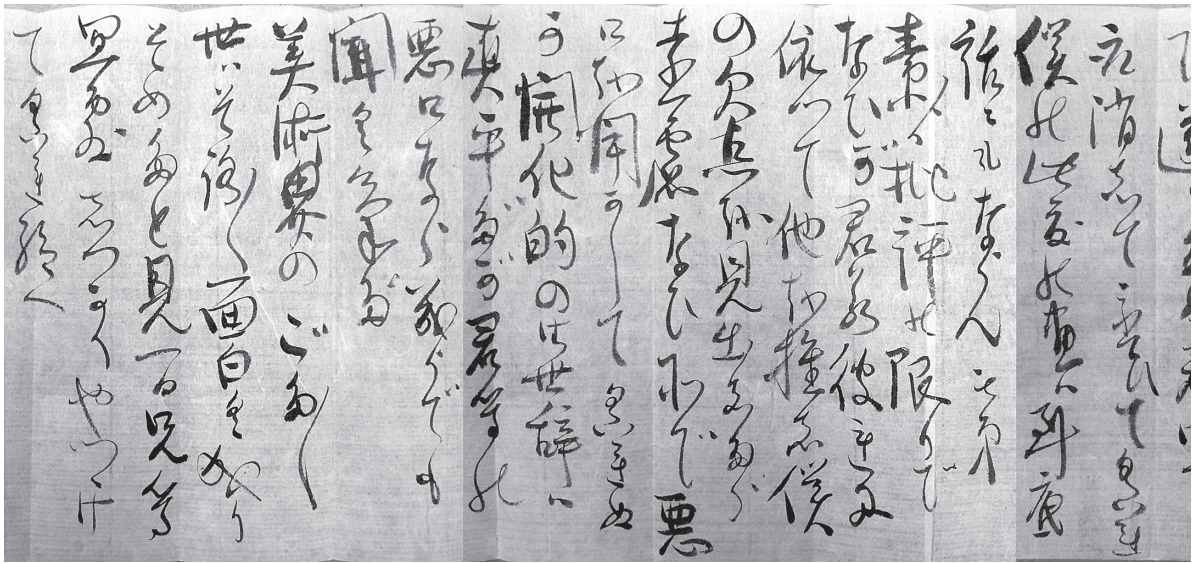
この年の明治美術会秋期展覧会は十月十日から始まっており、十月二十二日印刷、二十五日発行の展覧会図録では、藤島は「一四九 少女、一五〇 一竿風月、一五一 風景」の三点の油画を出品したことになる。手紙では藤島が、開会後は作品を受け付けない規則を知りながらも、作品を送ってしまったことを久米に伝えている。ただし一点は額が間に合わないで出品をあきらめたので取り消して欲しいと述べている。なお図録には「秋期展覧会委員」として松井昇、菊地鑄太郎、久米桂一郎、岩村透の名前が掲載されており、年齢の若い久米が実務の多くを担っていた可能性が高い。

また藤島は久米の母の具合が良くないことを案じており、翌年亡くなることになる久米の母が、この頃既に病氣であったことがわかる。また地方に住むため油彩画の材料がなかなか手に入らなかったようであり、画材用の油の精製方を教えて欲しいこと、展覧会の図録ができたなら送ってほしいことを頼んでいる。

(1) 青木茂監修『近代日本アートカタログコレクション』明治美術会『二〇〇一年、三〇九頁―三五六頁。』



るし不図思ひ付ひて
 規則書を見たら開
 会后ハどんな事情
 があつても受付
 けぬとのがあつたから
 初めから面白くもなひ
 図だし出すのを止め
 にし様かと思つて
 見たが、君二背約す
 るのも残念だし
 儘よ構まふことハなひ
 と覺悟して、出来
 上りもしないひのを送
 つてしまつた、目録二
 書ひてあつた今一枚の
 絵ハ縁が間二あハなひ
 で遂ニだめ、君宜しく



取消して置ひてくれ
 僕の此度の畫ハ到底
 話二もならん次第
 △ 素方批評の限りで
 なひが、君若彼れに
 依つて他を推し僕
 の欠点を見出したら
 遠慮なひ所で悪
 口を聞かしてくれぬ
 か、開化的の御世辞ハ
 真平だが君等の
 悪口なら幾らでも
 聞く氣だ
 美術界のごたく
 世ハそろく面白く成り
 そめたと見へる、兄等
 宜敷しつかりやつ、け
 てくれ給へ

却説君の母君ニハ
 此頃餘り勝れ給ハぬ
 とか聞ひたが君も嘸
 心配なことだらふと
 察する、何卒速ニ
 健康ニ回復せられ
 んことを禱る
 君ニ一つ聞きたひことが
 ある 石油の簡便
 なる精製法ハなひ
 かね つまり絵ニ
 つかへる位ひ迄ちよつと素人
 で仕上る工夫だ
 △あるなら知らして
 くれぬか
 今一つの願ひハ絵入
 目録が出来上つるが

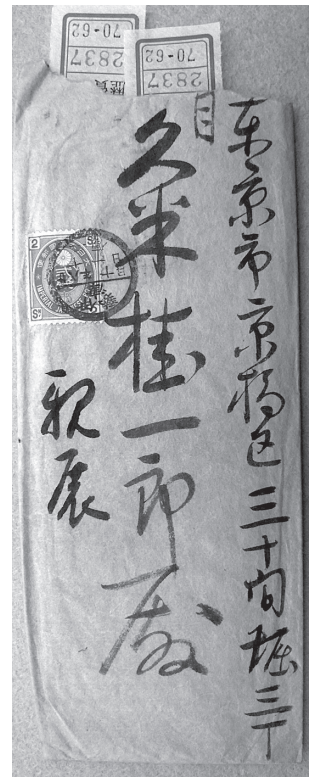
黒田清輝、久米桂一郎宛 藤島武二書簡

却説君の母君ニハ
 此頃餘り勝れ給ハぬ
 とか聞ひたが君も嘸
 心配なことだらふと
 察する、何卒速ニ
 健康ニ回復せられ
 んことを禱る
 君ニ一つ聞きたひことが
 ある 石油の簡便
 なる精製法ハなひ
 かね つまり絵ニ
 つかへる位ひ迄ちよつと素人
 で仕上る工夫だ
 △あるなら知らして
 くれぬか
 今一つの願ひハ絵入

今一つの願ひハ絵入
 目録が出来上つるが
 送つて貰ひ度ひ
 ものだ
 十月十一日
 藤島武二
 久米賀契

目録が出来上つたら
 送つて貰ひ度ひ
 ものだ
 十月十一日
 藤島武二
 久米賀契

封筒(縦一九・一cm、横七・六cm)
(表)

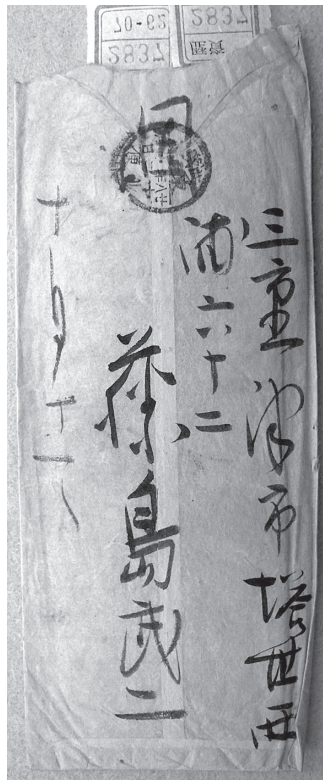


東京市京橋区三十間堀三丁目

久米桂一郎殿

親展

(裏)



三重津市塔世西

浦六十二

固 藤島武二

十月十一日

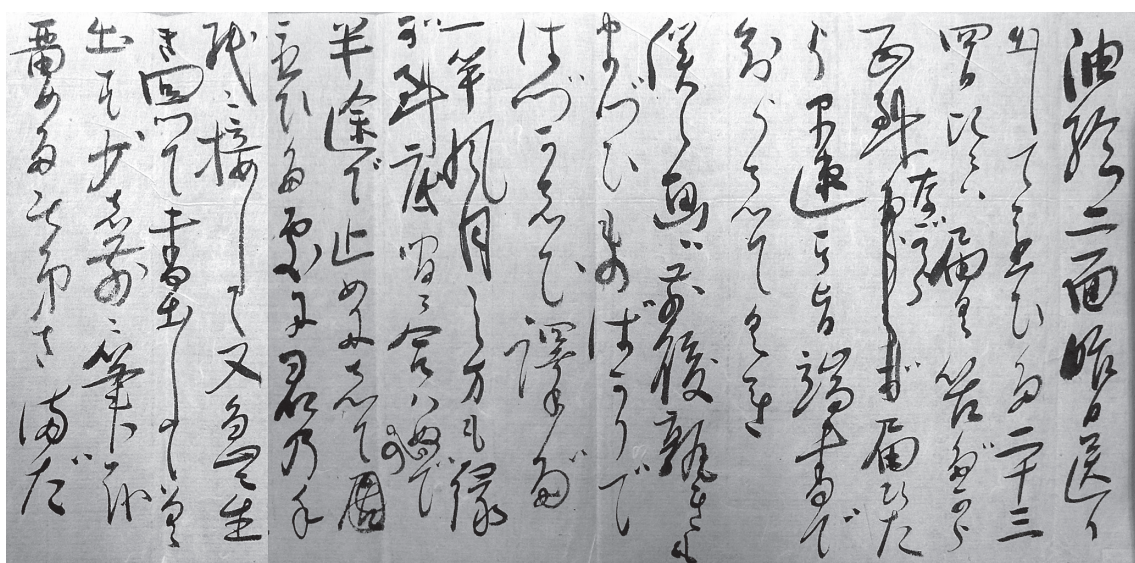
藤島武二《一竿風月》

藤島武二《少女》

明治28年明治美術会秋期展覧会目録所収縮図(『近代日本アート・カタログ・コレクション008 明治美術会』ゆまに書房、2001年)

明治二十八年十月二十一日付封書

(縦一五・九cm、横九六・六cm)



油絵二面昨日送り

出して置ひた、二十三

四日頃二ハ届く筈だから

面倒ながら届ひた

ら早速其旨端書で

知らしてくれ

僕之画ハ前後孰れも

まづひものばかりで

はづかしひ譯だ

一竿風月之方も縁

が到底間ニ合ハぬので

半途で止めにして

置ひた處に君の手

紙ニ接して、又急ニ生

き回つて書出している

出す少し前二筆を

留めた次第さまだ

7. 久米桂一郎宛藤島武二書簡(明治二十八年十月二十一日) 東京国立博物館蔵

前便では藤島が展覧会が始まるぎりぎり作品を送ったこと、額縁が間に合わない作品の出品をあきらめたことを久米に知らせていたが、その後久米から手紙が届いた模様である。おそらく久米が額を東京であつらえるから送るようにと伝えたのである。途中で止めた《一竿風月》に慌てて手を入れ、もう一点《失恋》なる作品と共に二十日に送ったと伝えている。図録はもう印刷にかかっている時期であったため、《失恋》は出品リストに掲載されていない。久米が藤島の出品のために助力した様子をうかがい知ることができる。

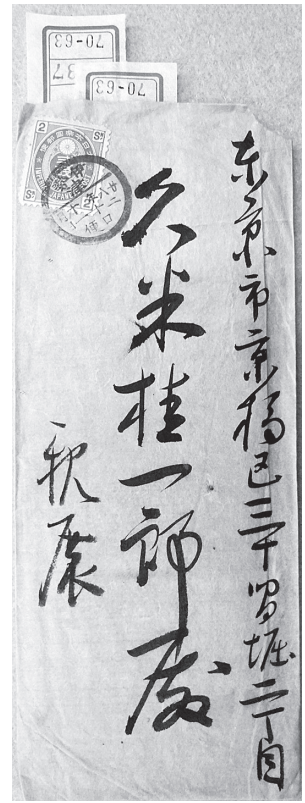
充分仕上るニハ暇が入ル
 ことだがそんなニして
 居られぬから済まぬ
 ことながら好ひかげん
 ニして間ニ合ハした次第
 だ
 女ノツラの方ハ題が入る
 なら「失戀」とでも
 して置ひてくれ
 つまり女がほれた
 男ニ捨てられて取亂
 した姿だ 直段ハ
 二十円だ
 此間の□頼んだ会社
 □□なまけで
 右之荷が着ひたら
 配達料 (ツマリ其地ノ
 会社から上野迄ノ届賃)

充分仕上るニハ暇が入ル
 ことだがそんなニして
 居られぬから済まぬ
 ことながら好ひかげん
 ニして間ニ合ハした次第
 だ
 女ノツラの方ハ題が入る
 なら「失戀」とでも
 して置ひてくれ
 つまり女がほれた
 男ニ捨てられて取亂
 した姿だ 直段ハ
 二十円だ
 此間の□頼んだ会社
 □□なまけで
 右之荷が着ひたら
 配達料 (ツマリ其地ノ
 会社から上野迄ノ届賃)

と云つていくらか取るだ
 らう、会之方でハ無論
 出せまひから君出して
 置ひてくれ
 此間のハ此地で拂つて置ひ
 たが其地で又請求しハ
 しなんだか
 此度ハ会社が違ふから
 此地で拂ふ譯ニいかぬとの
 事だ 君ハも何時も会の
 方ニ居ることもなからう
 から誰かつめ切りの人ニ
 頼んで置ひてくれ
 十月廿一日
 武二
 久米大兄

と云つていくらか取るだ
 らう、会之方でハ無論
 出せまひから君出して
 置ひてくれ
 此間のハ此地で拂つて置ひ
 たが其地で又請求しハ
 しなんだか
 此度ハ会社が違ふから
 此地で拂ふ譯ニいかぬとの
 事だ 君ハも何時も会の
 方ニ居ることもなからう
 から誰かつめ切りの人ニ
 頼んで置ひてくれ
 十月廿一日
 武二
 久米大兄

封筒（縦一九・〇cm、横七・六cm）
（表）

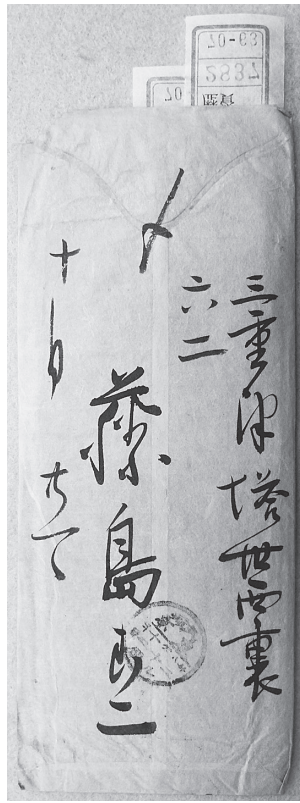


東京市京橋区三十間堀二丁目

久米桂一郎殿

親展

（裏）



三重津塔世西裏

六二

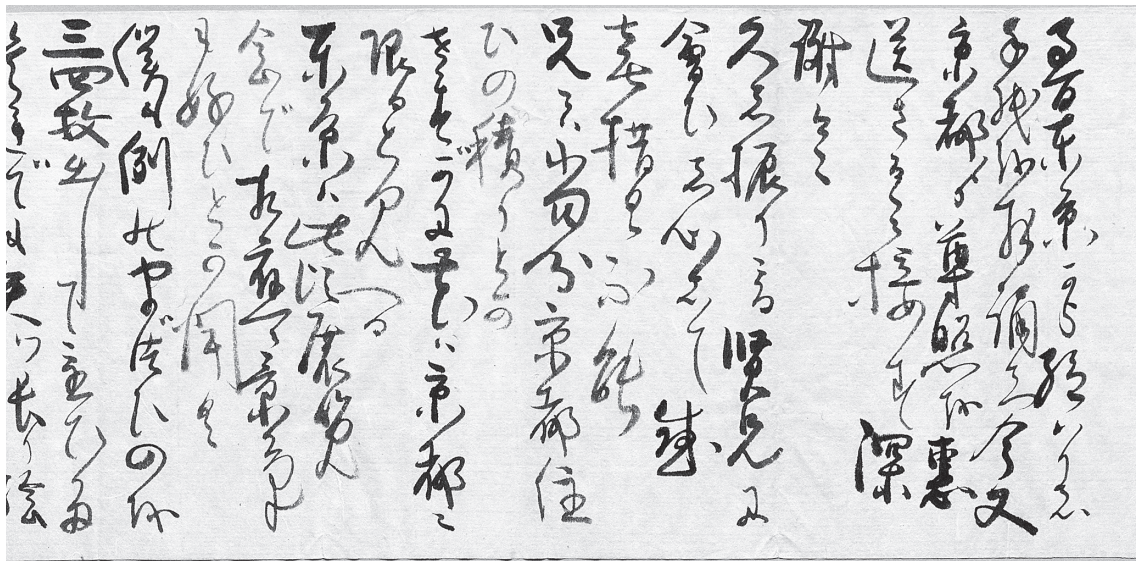
藤島武二

十月廿一日

黒田清輝、久米桂一郎宛 藤島武二書簡

明治二十八年十月二十二日付封書

(縦一五・八cm、横一一・四cm)



過日東京から給ハリし

手紙を拝誦し今又

京都方尊照を惠

送さるゝニ接す、深

謝々々

久し振りくゝる賢兄に

會ひし心して感

喜措く不能

兄ニハ當分京都住

ひの積りとか

さすがに花ハ京都ニ

限ると見へる

東京ハ此頃展覧

会で相應ニ景気

も好ひとか聞く

僕も例のまずひのを

三四枚出して置ひた

8. 黒田清輝宛藤島武二書簡(明治二十八年十月二十二日)

この書簡についても陰里鉄郎氏が読み下し、詳しく内容を紹介している。⁽¹⁾ 5の

九月二十二日の手紙で藤島は黒田に写真を送ってほしいと頼んだが、この手紙によって、黒田がその後東京から藤島に手紙を出していたこと、次いで京都から写真を送っていたことがわかる。藤島は5の手紙で黒田に京都住まいを続けるのかと尋ねていたが、その後の手紙で、黒田は藤島に、京都に当分留まること、写真師の松原の家に仮寓することを知らせたようである。十月十日付で久米が黒田に送った仏文の手紙はまだ水口屋敷宛てであり、「夫人によるしく」と書き添えている。⁽²⁾ したがって黒田が水口屋敷を出て夫人と別居したのは十月半ば頃であつたとみられる。

藤島は東京で自分が死んだという噂が流れていることを久米から聞いたことを自嘲気味に述べ、死んだような境遇ながらも絵かきになる強い希望を持っていることを訴えている。京都に出かけて黒田の指導を受けたいが、黒田の身辺の事情を図りかねており、京都で新しい女性と暮らしていたら迷惑なのではないかなどと様子をうかがっている。こうした文面から、黒田が妻と別居、あるいは離婚したことを既に藤島に伝えていたようである。

(1) 前掲、陰里鉄郎「画家たちの津(一)」四六―六〇頁、「画家たちの津(二)」六一頁―七五頁。

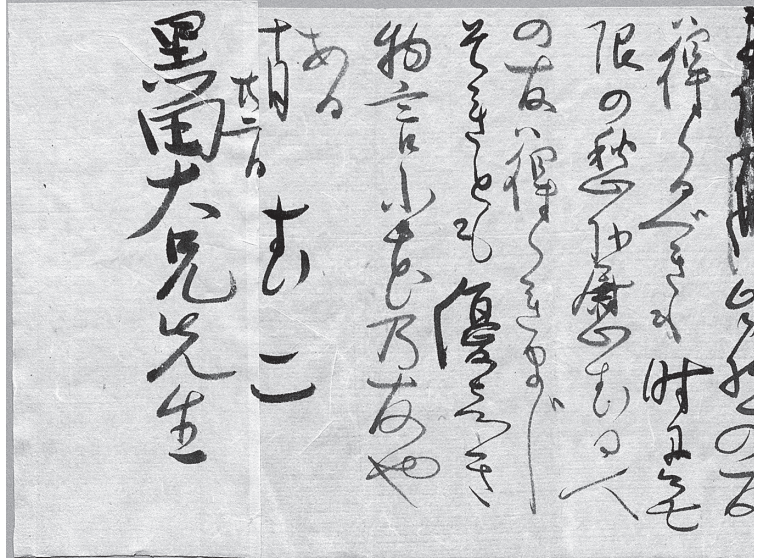
(2) 東京文化財研究所企画情報部編『黒田清輝フランス語資料集』東京文化財研究所、二〇一〇年、三〇八―三〇九頁所収、C093。

三つおとす
 死ぬるまで矢つ張り絵
 かきよめぬと云ふとハ随
 分推しの強い話だ
 が、持たが病ひ何かの
 因果ならんとあき
 らめて往生して居
 る事だ
 先頃東京で僕が死
 んでしまつたとの風
 説が切りに行れたと
 久米から云つて来た
 が、成程僕もそう
 聞いて見れば全く僕
 ハ死んで居るに違ひ
 なひよ、僕の今の境
 遇から考へて見ても

是れでも矢つ張り絵
 かきに成る氣とハ随
 分推しの強い話だ
 が、持たが病ひ何かの
 因果ならんとあき
 らめて往生して居
 る事だ
 先頃東京で僕が死
 んでしまつたとの風
 説が切りに行れたと
 久米から云つて来た
 が、成程僕もそう
 聞いて見れば全く僕
 ハ死んで居るに違ひ
 なひよ、僕の今の境
 遇から考へて見ても

死人と噂があるのも
 無理ハなひ話だ
 亡者の施餓鬼も功
 徳二なるだろう、偶二ハ
 手紙をくれ給へ
 此冬期休業頃二ハ
 是非出掛けて行つて
 少しでも兄の示引導
 を受け度ひと思へど
 其頃行れてハ君の方
 でちと迷惑かね
 兄の当時の宿所は
 松原とか云う写真
 屋か
 京都は君の無窮
 の希望を満たすべき
 無限の□自然の友

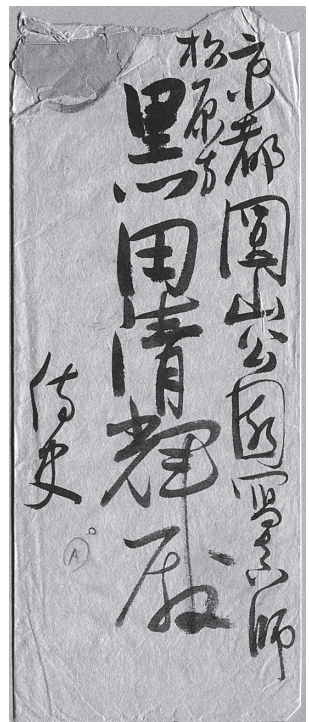
死んだと噂があるのも
 無理ハなひ話だ
 亡者の施餓鬼も功
 徳二なるだろう、偶二ハ
 手紙をくれ給へ
 此冬期休業頃二ハ
 是非出掛けて行つて
 少しでも兄の示引導
 を受け度ひと思へど
 其頃行れてハ君の方
 でちと迷惑かね
 兄の当時の宿所は
 松原とか云う写真
 屋か
 京都は君の無窮
 の希望を満たすべき
 無限の□自然の友



△
 十月 廿二日
 黒田大兄先生

ハ得らるべきも時に無
 限の愁を慰むる人
 の友ハ得られまじ
 それとも優しき
 物言ふ花の友や
 ある
 武二

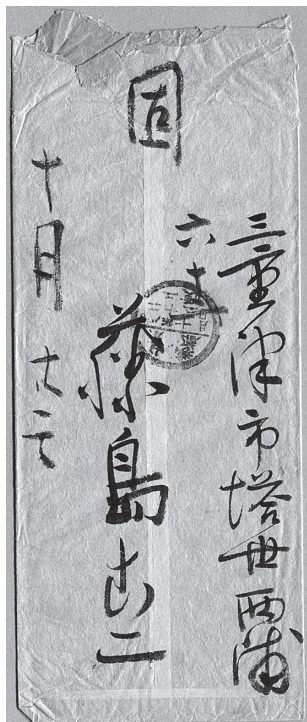
封書 (縦一八・八cm、横七・五cm)



京都圓山公園寫真師
 松原方

黒田清輝殿
 侍史

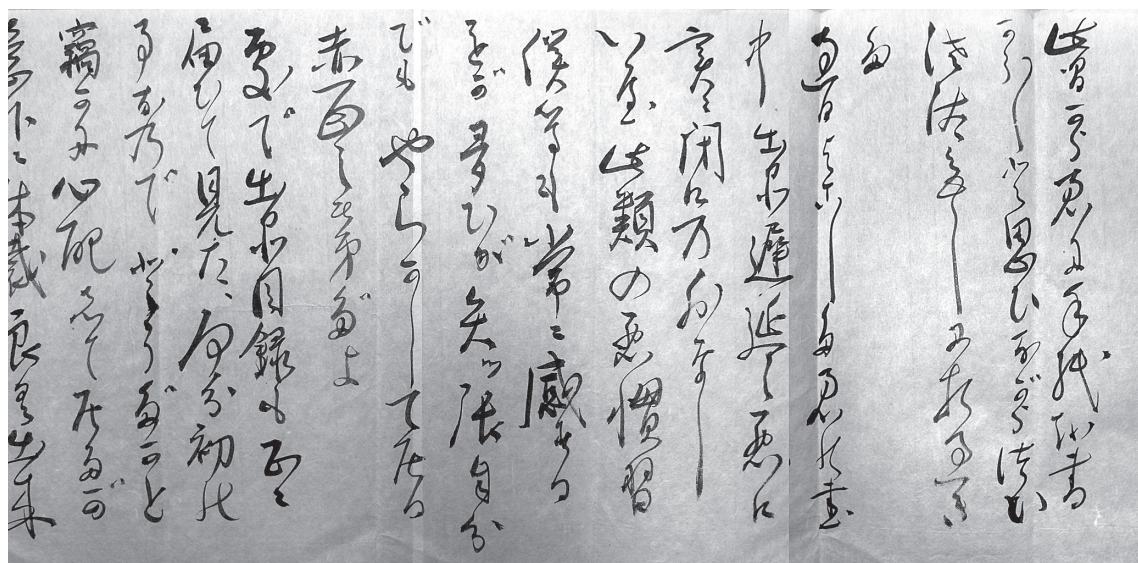
(裏)



三重津市塔世西浦
 六十二
 藤島武二
 十月廿二日

明治二十八年十一月三日付封書

(縦一七・九cm、横一六五・二cm)



黒田清輝、久米桂一郎宛 藤島武二書簡

此間から君に手紙を書

かうくと思ひながらつい

沙汰無しに打過ぎ

た

過日よこした君の書

中出品遅延之悪口

実二閉口の外なし

いや此類の悪慣習

僕等も常ニ感ずる

ことが多ひが矢ッ張自分

△でもやらかして居る

赤面之次第だよ

處で出品目録も正二

届ひて見た、何分初の

事なのでどうかと

竊かに心配して居たが

9. 久米桂一郎宛藤島武二書簡(明治二十八年十一月三日) 東京国立博物館蔵

これまでの書面から、藤島の明治美術会展出品作品が会期初めに間に合わなかったこと、二点は額に入れて送ったことがわかった。この手紙で藤島は目録を見た感想を長々と述べているが、本当の用件は、久米が安く額をあつらえて出品をしてくれたことへの礼と、その代金をまだ払えないことであつたことが読み取れる。文中の久米の「漁村の朝の風景」は目録「一二〇、秋陽海村に昇る」であろう。

この手紙の前には、久米から藤島に、展覧会に遅延した作品が多いことについて「悪口」を述べた手紙を送っていたようである。久米は黒田にも十月十日付のフランス語の手紙で「今日は展覧会の開会の日だ。すでに到着した作品がおよそ百八十点、遅れて着る作品が五十点から六十点ある」と書き送っている⁽¹⁾ので、非常に多くの作品が開会に間に合わず、展示の苦勞があつたことであろう。

(1) 東京文化財研究所企画情報部編『黒田清輝フランス語資料集』東京文化財研究所、二〇一〇年、三〇八―三〇九頁所収、C093。

意外に体裁良く出来
たから僕等迄も愉快で
たまらぬ位□のなので
君等の骨折りを謝
さねばならぬ次第だ
何卒此事ハ後來
毎秋出版する事ニき
めて段々發達させ度
ひ物だ
僕等のと其他二三の
最も拙劣のものを除
くの外ハ皆相應二面白
く出来たよ、其中原
画の方が却つてまづ
ハなひかと想像さる、
のもある様だが縮圖
で見た所でハ存外う
まく出来て居るので

意外に体裁良く出来たから僕等迄も愉快でたまらぬ位□のなので君等の骨折りを謝さねばならぬ次第だ何卒此事ハ後來毎秋出版する事ニきめて段々發達させ度ひ物だ僕等のと其他二三の最も拙劣のものを除くの外ハ皆相應二面白く出来たよ、其中原画の方が却つてまづハなひかと想像さる、のもある様だが縮圖で見た所でハ存外うまく出来て居るので

感心したのもある、只
遺憾に思ふのハ数の少
ない事だ
数ある中で最も感心し
たのハ君の海漁村の
朝の風景だ、是等ハ縮
図で見ても面白ひが原
画を見たら一層愉快な
らんと思ふ、その他の作も
なかなか面白ひよ。黒田の
諸作素ヨリ敬腹之外なし
黒田当人ハ古ひくづを澤
山出して置ひたと云つて
よこしたが野遊びの
圖などハ随分骨の折
れた物だろうと思はる
だがおのづからなる趣きハ
田舎の家屋ニ無雜作
ニ冢のつるさがつて居

感心したのもある、只遺憾に思ふのハ数の少ない事だ数ある中で最も感心したのハ君の海漁村の朝の風景だ、是等ハ縮図で見ても面白ひが原画を見たら一層愉快ならんと思ふ、その他の作もなかなか面白ひよ。黒田の諸作素ヨリ敬腹之外なし黒田当人ハ古ひくづを澤山出して置ひたと云つてよこしたが野遊びの圖などハ随分骨の折れた物だろうと思はるだがおのづからなる趣きハ田舎の家屋ニ無雜作ニ冢のつるさがつて居

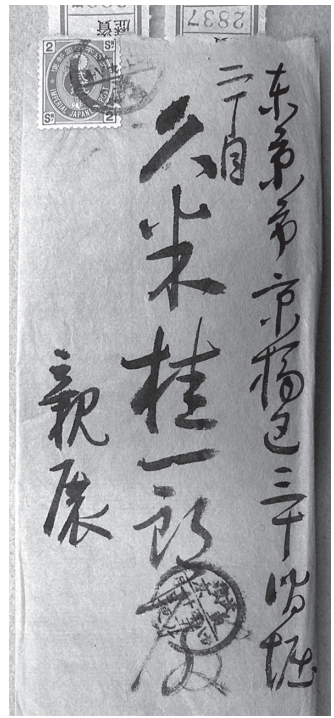
多岐にわたる人巧を
 経ぬ處、却つて面白ひ
 かと思へど如何のもの
 二や
 △何代体裁、製版共ニ申分
 なし、当地でも見て
 ほしひ云ふ者が澤山
 ある、執れ銘々各自ニ
 注文すること、思ふ
 斯道奨勵之為亦廣め
 為ニハ目錄出版ハ最も能
 良き一方便ならんと信ず。
 額縁之事ハ種々心配を
 掛けて濟まなひ譯だ
 代価も至極やすく出か
 してくれて難有候
 早速送るのだが今少し
 都合が悪ひから少し待
 つてくれ
 十一月三日
 武二

黒田清輝、久米桂一郎宛 藤島武二書簡

十一月三日
 久米大兄
 昨折二ハ目錄之洩
 きたる諸先生ハ妙作
 之評判しらして
 くれ給へ

武二
 久米大兄
 暇之折二ハ目錄ニ洩
 れたる諸先生の妙作
 之評判しらして
 くれ給へ

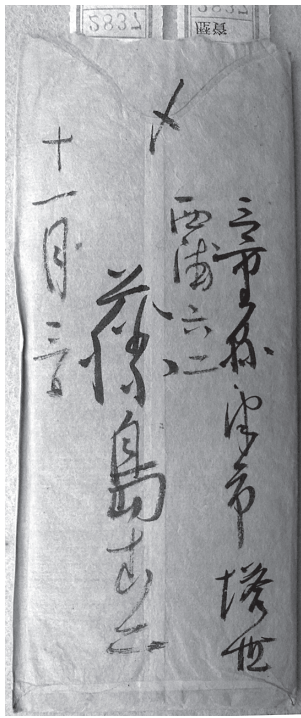
封筒(縦一八・三cm、横七・六cm)
(表)



東京市京橋区三十間堀
二丁目

久米桂一郎殿
親展

(裏)



三重縣津市塔世
西浦六一

藤島武二
十一月三日

黒田清輝《野の遊》

久米桂一郎《秋陽海村に昇る》

明治28年明治美術会秋期展覧会目録所収縮図(『近代日本アート・カタログ・コレクション008 明治美術会』ゆまに書房、2001年)

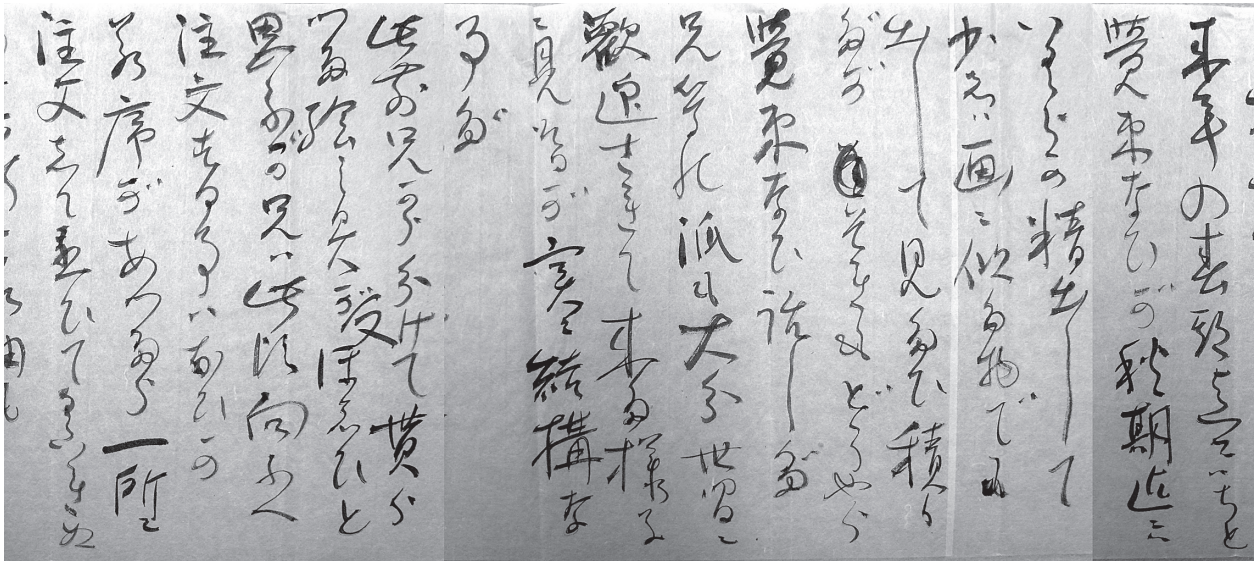
明治二十八年十一月三十日付封書

(縦一七・三cm、横一〇三・二cm)

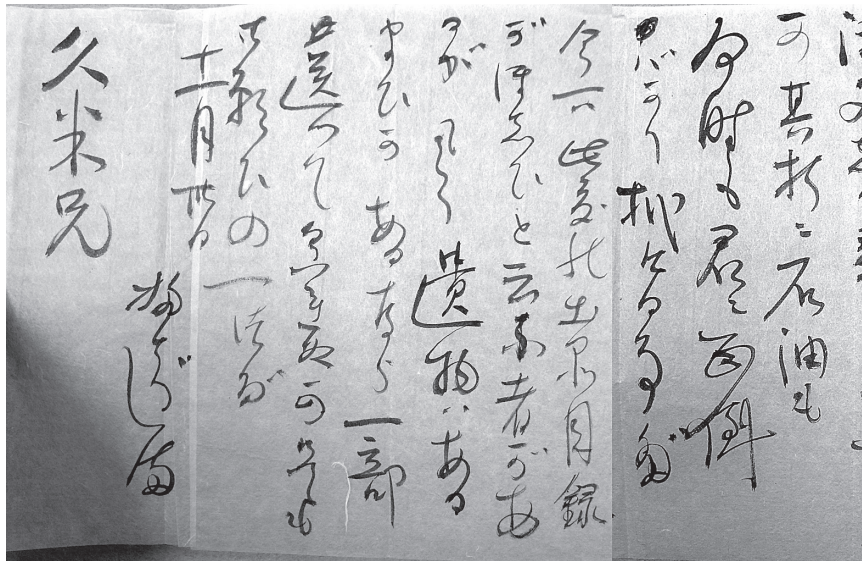
展覧会も大分盛んで
 あつた様子、新聞など
 にも見えて居たが兄等
 の折骨折察せらる
 時に額縁代ハ種々兄に
 心配掛けて置ひて大ニ
 延引して済まなひ
 たしか二円五十錢だと
 覚えて居たからそん
 丈送つて置ひた
 受取つて置ひてくれ
 給へ
 僕の本年の出し物ハ
 申譯にもならぬ品ばかり
 で大ニ面目なき次第

10・久米桂一郎宛藤島武二書簡(明治二十八年十一月三十日) 東京国立博物館蔵
 前便で支払いを待つてもらっていた額代を送ることができたためか、晴れ晴れ
 とした文面である。さらに久米に絵の具、石油(溶き油)、展覧会図録を頼んでいる。
 藤島は久米を通じて外国製の絵の具を入手していた様子であり、一連の手紙から、
 久米が非常に面倒見の良い人物であったことがわかる。

展覧会も大分盛んで
 あつた様子ニ新聞など
 にも見えて居たが兄等
 の折骨折察せらる
 時に額縁代ハ種々兄に
 心配掛けて置ひて大ニ
 延引して済まなひ
 たしか二円五十錢だと
 覚えて居たからそん
 丈送つて置ひた
 受取つて置ひてくれ
 給へ
 僕の本年の出し物ハ
 申譯にもならぬ品ばかり
 で大ニ面目なき次第

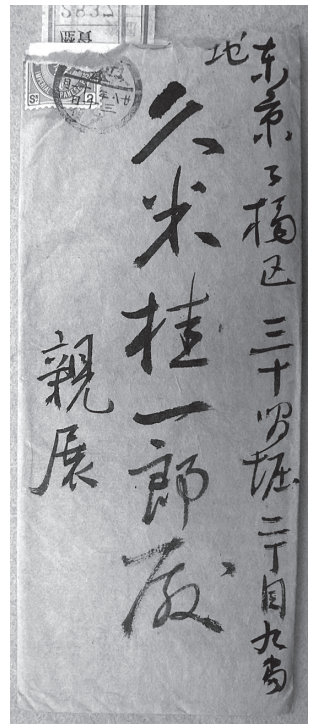


来年の春期迄二ハちと
 覺東なひが秋期迄二ハ
 いくらか精出して
 少しハ画二似た物でも
 出して見たひ積り
 △
 だが、それもどうやら
 覺東なひ話しだ
 兄等の派も大分世間ニ
 歓迎されて来た様子
 二見えるが実ニ結構な
 事だ
 此前兄から分けて貰ら
 った絵之具が又ほしひと
 思ふが兄ハ此頃向ふへ
 注文する事ハなひか
 若序があつたら一所ニ
 注文して置ひてくれぬ



か其折ニ石油も
 何時も君ニ面倒
 バかり掛ける事だ
 今一ハ此度の出品目録
 がほしひと云ふ者があ
 るがもし遺物ハある
 まひか あるなら一部
 送つてくれぬか、是も
 御願ひの一つだ
 △ 十一月三十日
 ふぢしま
 久米兄

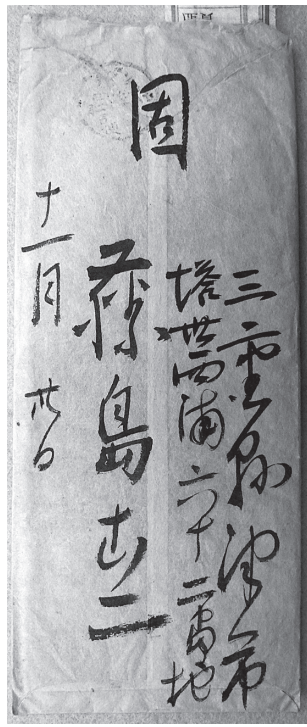
封筒（縦一八・九cm、横七・六cm）
（表）



東京区三十間堀二丁目九番地

久米桂一郎殿
親展

（裏）



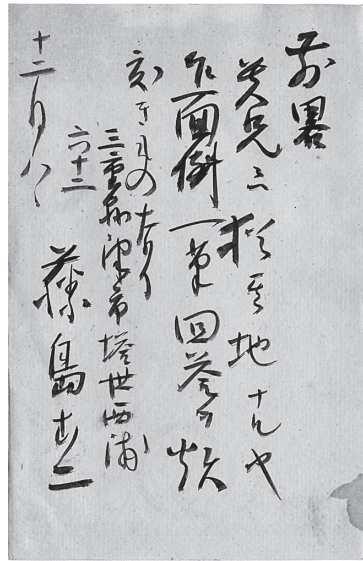
三重縣津市
塔世西浦六十二番地
藤島武二
十一月三十日

黒田清輝、久米桂一郎宛 藤島武二書簡

明治二十八年十二月八日付葉書

(縦一三・九cm、横八・九cm)

(裏)



前略

貴兄ニハ猶其地ナルヤ

乍面倒一筆回答ヲ煩

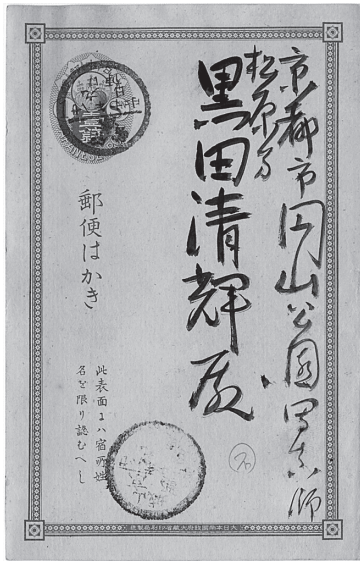
度きものなり

三重縣津市塔世西浦

六十二 藤島武二

十二月八日

(表)



京都市円山公園写真師
松原方
黒田清輝殿

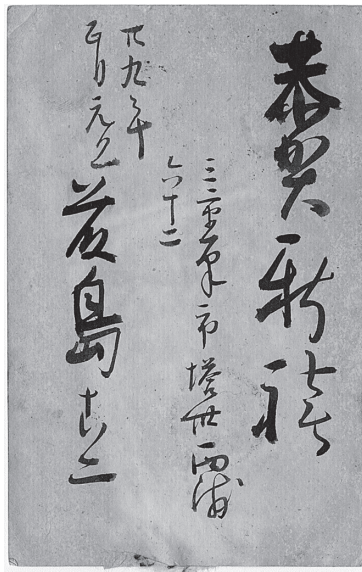
11. 黒田清輝宛藤島武二葉書 (明治二十八年十二月八日)

7の手紙で藤島が黒田を冬休み中に訪ねたいと述べており、この葉書は藤島が京都に黒田を訪問しようとして確認を求めたものであったと思われる。

明治二十九年一月一日付葉書

(縦一三・九cm、横八・九cm)

(裏)



恭賀新禧

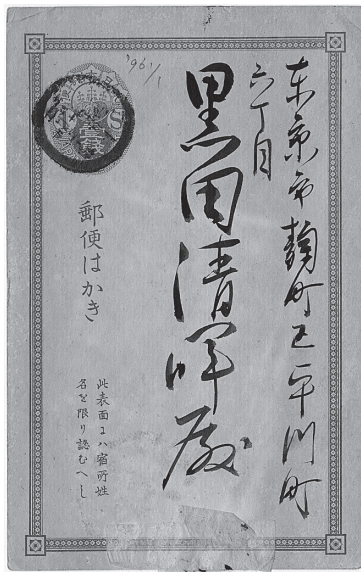
三重津市塔世西浦

六十二

廿九年

正月元旦 藤島武二

(表)

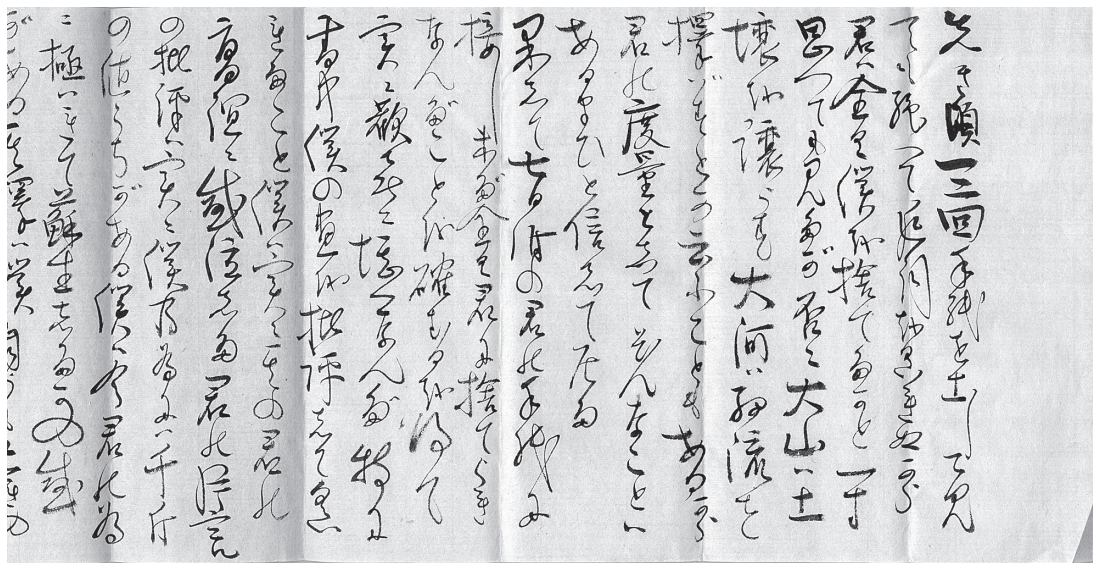


東京市麴町区平川町
六丁目
黒田清輝殿

12. 黒田清輝宛藤島武二葉書 (明治二十九年一月一日) 年賀状。

明治二十九年一月九日付封書

(各縦一七・六cm、横六〇・二cm)



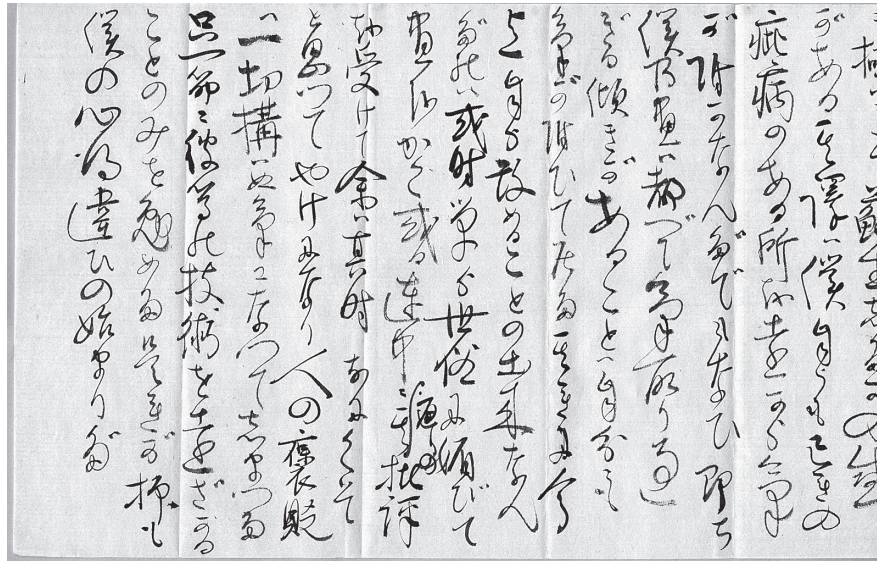
先き頃一二回手紙をだして見ても絶へて返詞をくれぬから君ハ全ク僕を捨てたかと一寸思つても見たが、否々大山ハ土壤を譲らす大河ハ細流を擇バすとか云ふこともあるから君の度量としてそんなことハあるまひと信して居た果して七日附の君の手紙に接し未だ全く君に捨てられなんだことを確むるを得て実ニ歡喜ニ堪へなんだ、特に書中僕の畫を批評してくれたこと僕ハ実ニ其の君の高誼ニ感泣した、君の片言の批評ハ実ニ僕の為にハ千斤の値うちがある、僕ハ今君の為にニ極ハれて蘇生したかの感

黒田清輝、久米桂一郎宛 藤島武二書簡

13 黒田清輝宛藤島武二書簡(明治二十九年一月九日)

長文の手紙である。⁽¹⁾ 藤島は十月二十二日の手紙で中学校の冬休みの間に京都にいる黒田のもとを訪ねて指導を受けたいと伝えており、十二月八日の葉書で黒田がまだ京都にいるか尋ねて訪問の時期をうかがっていた。しかしこの書面には藤島の手紙に返事をくれなかったと書いている。久米が十二月十六日に結婚式をおこなうため、黒田にいつ上京するかを尋ねる手紙を十二月十日付で出しているため、⁽²⁾ 黒田が藤島の手紙と入れ違いに上京してしまった可能性があるだろう。そのために藤島が黒田を訪問することを断念したか、あるいは黒田を訪ねても留守であったことも考えられるだろう。文面から黒田が藤島の絵についての批評を一月七日付の手紙で書き送ったことがわかるが、藤島が黒田の留守中に絵を置いてくるなどをしていなければ、前年秋の明治美術会出品作を念頭に批評したことになる。黒田から「気取り過ぎる」傾向を指摘され、同じようなことは以前にも指摘されていたが、黒田の言葉は素直に聞く気持ちになったことを述べている。「気取り過ぎ」という言葉がどのような内容を指すのかは、当時の作品が残っていないため正確には不明だが、たとえば「失恋」と題してほしいとして送った作品のように、一種の物語的な演出を指すのであれば、後の「浪漫主義」的な資質につながるものである。藤島が黒田の自然主義とは異なる個性を持っていたことに、黒田が気づいていたことを示す指摘である。

また文末では黒田に画材をフランスから取り寄せるならば自分の分も頼みたいと書いている。十一月三十日付の久米宛の手紙で久米に問い合わせていたが、その関係で黒田に頼んでいるようである。藤島が高価な輸入絵の具を無理をしても入手したいと強く望んでいた様子がわかる。黒田自身も京都で絵の具が足らずに久米から融通してもらおうとして、久米が日本にも似た絵の具があると書き送っており、⁽³⁾ 輸入絵の具は彼らの間でも貴重であった。東京美術学校教授黒田清輝宛のバリ、モンパルナスの画材屋、シャルボ氏からの手紙⁽⁴⁾によって、滞仏中より黒田がこの画材屋と懇意であったことからここを通じて帰国後も画材を購入していた様子がうかがわれる。



がある、其譯ハ僕自らも己れの
 疵病のある所を遠から氣
 が附かなんだでもなひ、即ち
 僕の畫ハ都べて氣取り過
 ぎる傾きがあることハ自分二も
 氣が附ひて居た、其れに今
 迄自ら改めることの出来なん
 だのハ或時単より世俗に媚びて
 畫をかく或る連中ニ其通りの批評
 を受けて、余ハ其時 なにくそ
 と思つてやけになり、人の褒貶
 ハ一切構ハぬ氣ニなつてしまつた
 只一筋ニ彼等の技術を遠ざかる
 ことのみを勉めた、是れが抑も
 僕の心得違ひの始まりだ

- (1) この書簡の影印と翻刻は、田中善明編「黒田清輝宛藤島武二書簡」『藤島
 武二・岡田三郎助展』二〇一一年、三重県立美術館、そごう美術館、一五一
 一五七頁のなかで紹介されている。
- (2) 前掲『黒田清輝フランス語資料集』、三二一―三二二頁所収、C097°。
- (3) 前掲、C097°。
- (4) 前掲、C102、C108°。

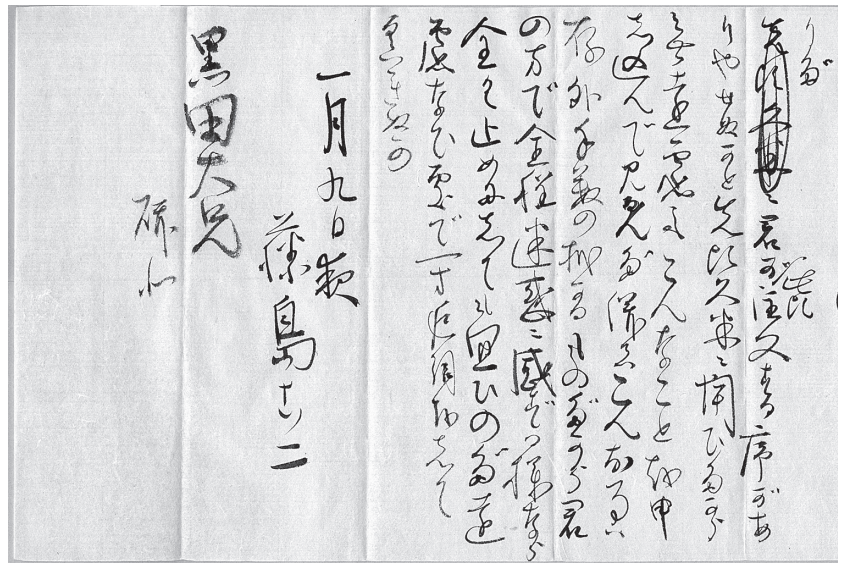
②
 色の単調、形の不健全、
 充分氣を附けたら段々改めることが
 出来ようが、此心得違ひ斗りハ自ら
 氣が附いて居ても是れを改める
 のが何んだか敵に降参する様で
 残念な心持がして居た、今思
 へば實ニ迷ひのてつぺんだ、君の
 一言は實ニ頂門の一針、實ニ参つた
 實ニありがたひ、後來必ず服
 膺してまじめに描くことに
 する
 こう言ふとなんだか申譯けの
 様だが、僕等の境遇でハ一つのつま
 らぬ畫をかくにも非常な困難
 と闘ハねばならぬ、其れは全く技術
 の上の苦心で無く種々の困難と喧
 嘩せねばならぬ、其大敵の為にいつも
 失敗して自分の技量文を一ぱい

②
 色の単調、形の不健全ハ
 充分氣を附けたら段々改めることが
 出来ようが、此心得違ひ斗りハ自ら
 氣が附いて居ても是れを改める
 のが何んだか敵に降参する様で
 残念な心持がして居た、今思
 へば實ニ迷ひのてつぺんだ、君の
 一言は實ニ頂門の一針、實ニ参つた
 實ニありがたひ、後來必ず服
 膺してまじめに描くことに
 する
 こう言ふとなんだか申譯けの
 様だが、僕等の境遇でハ一つのつま
 らぬ畫をかくにも非常な困難
 と闘ハねばならぬ、其れは全く技術
 の上の苦心で無く種々の困難と喧
 嘩せねばならぬ、其大敵の為にいつも
 失敗して自分の技量文を一ぱい

働かすことと云ふ事なきは（技術家のうぬほ
れ大抵こんなもの
だが）情ありて
 記した畫ハ一つも無ひ、博覧会や
 頃先頃の出品の如き実ニ君等に
 見せた譯のもので無ひ 處が
 此愧ぢを忍び得て又非常の利
 益を得た、僕の最も短所とする
 所を君に示摘されたのハ実ニ
 僕の幸福である、此事ハ幾重
 にも君ニの恵みを感じする處だ
 是れから充分高示を服膺し
 て勉強しよう、そうして此秋期
 の会迄迄頃ニハいくらか絵ニ似た
 物でも描ひ手又見て貰うことに
 しよう
 僕ハ今暗黒の裡をたどりつつあるなり
 此時微光となりて遙に僕を導く
 もの君を措ひて誰かあらん伏して
 請ふ垂教を吝むなからんことを

働かすことと云ふ事なきは
 情ありて
 記した畫ハ一つも無ひ、博覧会や
 頃先頃の出品の如き実ニ君等に
 見せた譯のもので無ひ 處が
 此愧ぢを忍び得て又非常の利
 益を得た、僕の最も短所とする
 所を君に示摘されたのハ実ニ
 僕の幸福である、此事ハ幾重
 にも君ニの恵みを感じする處だ
 是れから充分高示を服膺し
 て勉強しよう、そうして此秋期
 の会迄迄頃ニハいくらか絵ニ似た
 物でも描ひ手又見て貰うことに
 しよう
 僕ハ今暗黒の裡をたどりつつあるなり
 此時微光となりて遙に僕を導く
 もの君を措ひて誰かあらん伏して
 請ふ垂教を吝むなからんことを

③ 毎もこんなことば君を困らす
 譯だが此願聞ひてくれまひかね
 それは他でもなひ 絵之具を
 注文して貰うことだ、万一受合つて
 くれるなら 品数ハ君等が是迄
 使つた様なもので好ひよ
 此暑中休みにもちと本気に
 描ひて見たひと思ふから此度ハ
 「デコラシヨン」用で無ひ方が望みだ
 (なま意気) 其中で銀白を少し
 餘計にして其他の「ウルトラメール」とか
 「カラン ス□□カルマン」とか値段の高ひ方がわ
 ハ若し出来得るなら一本若しくハ
 二本づつ位にして置いて貰ひ度
 ひ其辺ハ君のはからひ二任すそれから
 序ニ石油も欲しひ此度ハ「トアル」の
 方ハ止めだ
 右代金の事ハ猶此前聞ひた様な工合
 ひニ品物が到着した上でよひか
 若しそう出来れば僕の方でハ最も
 幸だ、其内ニハどうか工面して
 決して君の方ニハ迷惑ハ掛けぬ積



りだ
 先頃久米二君が此頃注文する序が
 りやせぬかと先頃久米二聞ひたから
 無遠慮二もこんなことを申
 し込んで見るんだ、併しこんな事ハ
 存外手数の掛かるものだから君
 の方で余程迷惑二感ずる様なら
 全く止めにしても宜ひのだ、遠
 慮なひ處で一才返詞をして
 くれぬか

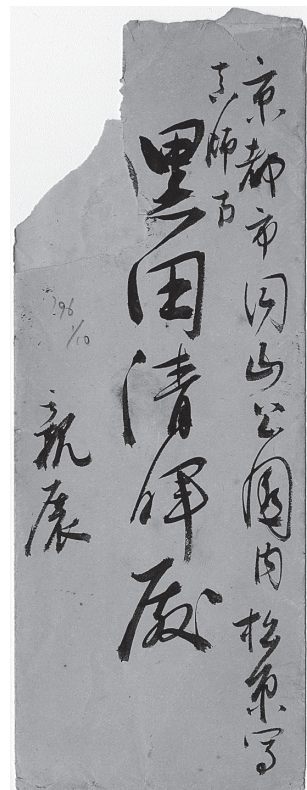
一月九日夜

藤島武二

黒田大兄

研北

封筒 (縦一八・〇cm、横六・九cm) (表)



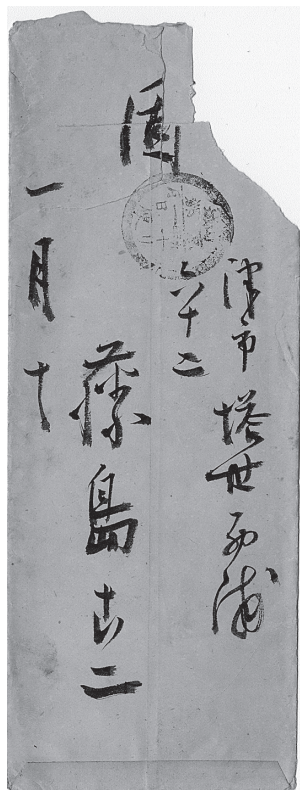
京都市円山公園内松原寫

真師方

黒田清暉殿

親展

(裏)



津市塔世西浦

六十二

藤島武二

一月十日